

21世紀減災社会シンポジウム 報告書

津波から命を守るために

～東日本大震災15年・次の巨大地震への教訓



【写真提供：朝日新聞社】（宮城県気仙沼市）

■ 日時 令和8(2026)年1月23日(金) 13:00～16:30

■ 会場 仙台市戦災復興記念館(仙台市青葉区)

主催：朝日新聞社、(公財) ひょうご震災記念21世紀研究機構

共催：河北新報社

後援：内閣府政策統括官(防災担当)、復興庁、総務省消防庁、岩手県、宮城県、
福島県、兵庫県、仙台市、関西広域連合

津波から命を守るために

～東日本大震災15年・次の巨大地震への教訓

目 次

開催概要	2
プログラム	3
講師等プロフィール	4
主催者等挨拶	6
基調講演	10
朗読	25
パネルディスカッション	29

開催概要

趣 旨

2026年3月には東日本大震災から15年の節目を迎えます。今回は、東北地方の地域報道を担う河北新報社とも連携して、東日本大震災の大きな教訓である津波防災に焦点をあて、南海トラフ地震など次なる巨大地震の切迫性が指摘される中、東日本大震災の経験から何を学び、どのように備え、教訓を伝えていくのかについて考えます。

テーマ：津波から命を守るために～東日本大震災15年・次の巨大地震への教訓

日 時：令和8（2026）年1月23日（金）13：00～16：30

会 場：仙台市戦災復興記念館（仙台市青葉区）

主 催：朝日新聞社・（公財）ひょうご震災記念21世紀研究機構

共 催：河北新報社

後 援：内閣府政策統括官（防災担当）、復興庁、総務省消防庁、岩手県、宮城県、福島県、
兵庫県、仙台市、関西広域連合

参加者：110名

オンライン視聴者：434名



プログラム

13：30 開会挨拶

坂尻 顕吾 （朝日新聞社取締役（コンテンツ統括／編集担当））

一力 雅彦 （河北新報社代表取締役社長）

伊藤 哲也 （宮城県副知事）

13：15 基調講演 「東日本大震災に学ぶ ～津波の脅威から身を守る～」

今村 文彦 （東北大学副学長・災害科学国際研究所教授）

14：15～14：25 休 憩

14：25 朗 読

Team Sendai （仙台市職員有志の自主研究グループ）

14：40 パネルディスカッション

パネリスト

矢守 克也 （京都大学防災研究所副所長・教授）

佐藤 仁 （前南三陸町長）

丹野 祐子 （津波復興祈念資料館「閑上の記憶」代表）

越中谷 郁子 （河北新報社記者）

コーディネーター

御厨 貴 （ひょうご震災記念21世紀研究機構研究戦略センター長／
東京大学名誉教授）

16：30 閉 会

講師等プロフィール

※プロフィールは開催当時のもの

基調講演



今村 文彦（いまむら ふみひこ）

東北大学副学長・災害科学国際研究所教授

東北大学大学院修了。同工学研究科附属災害制御研究センター助教授、同教授を経て、2014年より2023年まで災害科学国際研究所長。2025年4月より副学長。専門は津波工学および自然災害科学で、津波被害の軽減を目指し、津波予警報システムの開発や太平洋での防災対策等の研究を数多く実施。中央防災会議専門調査会委員、東日本大震災復興構想会議検討部会委員、土木学会副会長など。現在、復興庁復興推進委員会委員長、一般財団法人3.11伝承ロード推進機構代表理事など。主な受賞は、NHK放送文化賞（平成26年）、文部科学大臣表彰、防災功労者内閣総理大臣表彰（平成28年）、濱口梧陵国際賞受賞（令和2年）。

朗読



Team Sendai（ちーむせんだい）

Team Sendai（ちーむせんだい）は、2010年9月に仙台市職員有志で立ち上げた自主研究グループ。市職員だけでなく、NPOや公民館職員などの様々なメンバーとともに、組織を超えての情報共有や自己研鑽のための活動をしてきた。東日本大震災発生後は、仙台市職員の震災体験を記録し伝承する活動を始め、未経験者でもわかりやすくイメージしやすいよう独自の伝承プログラムを作成。防災・減災に役立ててもらおうと、役所内外への出前講座やイベント等で紹介。

パネルディスカッション

パネリスト（順不同）



矢守 克也（やもり かつや）

京都大学防災研究所副所長・教授

専門は防災心理学、災害情報学。長年にわたって地域防災や防災教育の分野で活動。開発した教育ツールに防災ゲーム「クロスロード」、津波避難訓練支援アプリ「逃げトレ」など。地区防災計画学会会長、日本災害復興学会会長、日本災害情報学会副会長など、学会の要職を歴任。『避難学』（東京大学出版会）、『防災心理学入門』（ナカニシヤ出版）など著作多数。NHK「明日をまもるナビ」に「ヤモリン博士」として登場するなどマスメディア出演も多数。



佐藤 仁（さとう じん）

前南三陸町長

1951年、宮城県志津川町（現在の南三陸町）出身。同町議、同町長を経て2005年、歌津町と合併して発足した南三陸町の初代町長（2025年11月退任）。2019年5月から2021年5月まで宮城県町村会会長を務める。東日本大震災の当日、町防災対策庁舎で津波に巻き込まれたが生還。「なりわいの場所は様々であっても、住まいは高台に」を基本に、防災集団移転促進事業、災害公営住宅整備事業等を実施し、2023年7月に復興事業を完遂させる。



丹野 祐子（たんの ゆうこ）

津波復興祈念資料館「関上の記憶」代表

津波復興祈念資料館「関上の記憶」代表、語り部。東日本大震災で当時中学1年生の長男と義理の両親を亡くす。関上中学校遺族会を立ち上げ、メンバーらとともに「子どもたちの生きた証を残したい」と慰霊碑を建立。現在は関上小中学校に設置。「関上の記憶」では、修学旅行生や企業研修で来る全国からの来館者を受け入れ、「語り部講話」や「関上案内ガイド」を提供。「今後は誰も同じような想いをする人がいないように」と語り部活動を行っている。



越中谷 郁子（えっちゅうや いくこ）

河北新報社記者

山形県米沢市出身。2001年入社。整理部、報道部、石巻総局、生活文化部などを経て、2022年から防災・教育室。25年に機構改革により教育・防災連携室。教育に新聞を活用するNIEを担当すると共に、小中学生の防災意識向上に向け、小学生親子対象の防災キャンプを企画し、中学生対象の「かほく防災記者」、防災ワークショップ「むすび塾」事業などに携わる。25年に防災士取得。

コーディネーター



御厨 貴（みくりや たかし）

ひょうご震災記念21世紀研究機構研究戦略センター長／東京大学名誉教授

東京大学法学部卒業。専門は近代日本政治史、オーラル・ヒストリー。東京都立大学教授、東京大学先端科学技術研究センター教授、放送大学教授などを歴任し、現在、東京大学先端科学技術研究センターフェロー、放送大学客員教授、サントリーホールディングス取締役。2017年よりひょうご震災記念21世紀研究機構現職。2018年紫綬褒章受章。2024年瑞宝中綬章受章。2011年4月より東日本大震災復興構想会議議長代理、続けて2012年2月より翌年3月まで復興庁復興推進委員会委員長代理を務める。主な著書に『「戦後」が終わり、「災後」が始まる。』（千倉書房2011年）、『別冊アステイオン「災後」の文明』（共編、阪急コミュニケーションズ2014年）などがある。

■ 主催者開会挨拶



写真提供：朝日新聞社

坂尻 顕吾（朝日新聞社取締役（コンテンツ統括／編集担当））

今年の3月11日で東日本大震災の発災から15年の節目を迎えます。巨大地震による大津波が町をのみ込み、多くの方々の命と暮らしを奪いました。さらには東京電力福島第一原発事故も重なって未曾有の複合災害となり、その影響は今なお続いています。ここに改めて、犠牲になられた方々に謹んで哀悼の意を表すとともに、被災された皆さま方に心からお見舞いを申し上げます。また、長きにわたり復興に尽力されてきた皆さま方にも厚く敬意を表させていただきます。

東日本大震災は自然の脅威と現代社会のもろさを私たちに突き付け、備えの在り方を根底から問い直す契機となりました。私ども朝日新聞社もこの震災をきっかけに、防災・減災の報道に一層力を入れてまいりました。このシンポジウムもその一環でありまして、阪神・淡路大震災を機に生まれたひょうご震災記念21世紀研究機構の皆さま方と共に各地で開催しています。仙台での開催は震災から5年と10年の節目に続き5年ぶりとなります。今回も河北新報社様に共催としてご賛同いただきました。

今回のシンポジウムのテーマには「津波

から命を守るために」を掲げております。津波からの迅速な避難、津波に強い社会づくりは東日本大震災の大きな教訓です。しかし、年月の経過とともに人々の意識は薄れ、当時を知らない世代も増えています。ここで原点に立ち返り、改めて津波の脅威と教訓を語り継ぎ将来の備えにつなげていきたい、それが主催者としての願いでもあります。このシンポジウムの内容は、記事として広く読者の皆さまにもお届けする予定です。15年前に起きたこととその教訓を振り返り、各地の備えに生かしていただければ幸いです。

最後になりますが、ご来賓の皆さま、ご参加いただきました皆さま、またシンポジウムの運営に携わった関係者の皆さま方に心より御礼申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございます。

■ 共催者開会挨拶



写真提供：朝日新聞社

一力 雅彦（河北新報社代表取締役社長）

本日は新年のご多用の中、また、大変寒さの厳しい中、21世紀減災社会シンポジウムにお集まりいただき、またオンラインを通じて各地からご視聴いただき、誠にありがとうございます。本シンポジウムは朝日新聞社様、ひょうご震災記念21世紀研究機構様と共催で開催されますこと、大変ありがたく、意義深く思っております。多くの皆さまのご支援、ご協力に感謝を申し上げます。ありがとうございます。

東日本大震災から間もなく節目の15年を迎えます。ハード面の復旧が進んだ一方で、被災地では高齢化と人口の流出に歯止めがかからず、地域コミュニティの維持が深刻な問題となっています。宮城県の災害公営住宅では孤独死が高止まりしており、心のケアの一層の充実が求められています。震災の経験と教訓を振り返るとともに、今後なお、新たに浮かび上がる課題、そして被災地の実情をきめ細かく丁寧に伝えていくことが私たちの責務です。

昨年7月にはカムチャツカ半島沖の地震に伴う津波警報が出され、12月には青森県東方沖を震源とする地震で最大震度6強を記録して、初めて後発地震注意情報が発

表されました。大きな自然災害が多発しています。震災の教訓を伝え、風化を防止して、次への備えにつなぐことは被災地の新聞社にとって不変の使命です。防災・減災ワークショップの「むすび塾」、大学生らを対象にした「次世代塾」、そして中学生が自ら備えに取り組み発信する「かほく防災記者」のプロジェクトをそれぞれ継続し、今後も教訓の伝承と地域防災力の底上げに取り組んでまいります。震災から15年が経過するということは、4月からの新年度になりますと中学生以下の世代は全て震災後に生まれた子どもたちになります。体験や記憶のない世代が増える中、若い人たちが震災の教訓を学び、そして新しい感性と自らの言葉で教訓を語り直し、被災経験に主体的に取り組む担い手になるよう支援していくことがますます大切になっています。

本日のテーマは「津波から命を守るために」です。多角的な視点から課題に挑まれている専門家の皆さまをお迎えしました。ハード・ソフトの両面から15年の歩みをたどり、今後どのような備えを構築すべきか、具体的な指針が示されることを期待しています。本日のシンポジウムが皆さまと共に、次なる巨大地震から命を守るための確かな一歩となることをお願い申し上げて挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。よろしくお願いします。

■ 開催地代表挨拶



写真提供：朝日新聞社

伊藤 哲也（宮城県副知事）

本日は全国各地から多くの皆さまにご参加いただきまして、誠にありがとうございます。また、本シンポジウムを開催されました朝日新聞社、ひょうご震災記念21世紀研究機構、河北新報社をはじめ、企画準備にご尽力賜りました全ての関係者の皆さまに対し、心から敬意と感謝を申し上げます。

さて、今年は東日本大震災から15年という大きな節目の年であります。東日本大震災では巨大地震とそれに伴う津波により多くの尊い命が奪われ、特に沿岸地域においては住まい、生業、地域コミュニティが広範にわたって失われたほか、東京電力福島第一原子力発電所事故が併発するという、まさに国難というべき災害でありました。そのような中、被災地ではこれまで多くの団体や住民の皆さまから、物心両面で多大なご支援を賜りました。国の内外から寄せられた数え切れないほどの支援と励ましは、復興への歩みを支える大きな力となってまいりました。ここに改めて深く感謝を申し上げます。ありがとうございます。

今年度は国が掲げる第2期復興・創生期間が終了する区切りの年でもあります。本県では公共インフラの復旧や復興まちづく

りの取り組みはおおむね完了いたしました。が、被災者の心のケアやコミュニティの再生、産業・生業の下支え、震災の記憶や教訓の伝承など、時間をかけて向き合い続けるべき課題も今なお残されております。特に東日本大震災を経験した本県では、その教訓と経験を社会全体で共有し、次なる大規模災害への備えとして国内外に発信していく責務があると考えております。

近年、令和6年能登半島地震や、令和元年東日本台風など、全国各地で地震や豪雨による大規模な自然災害が相次いで発生しております。さらに昨年はカムチャツカ半島付近の巨大地震や青森県東方沖地震に伴う津波が発生し、広い範囲で津波警報が発令されました。県内では大きな人的被害は確認されませんでした。津波被害が決して過去の出来事ではないということ、今後も向き合うべき現実のリスクであることを改めて認識させられるものでありました。今後、切迫性が高まっている南海トラフ地震や首都直下地震、日本海溝・対馬海溝沿いの巨大地震など、甚大な被害が想定される地震に対応するため、国では防災庁の設置に向けた議論が進められるなど、防災対策や危機管理体制の構築の動きが活発となっており、地方自治体に求められる役割も一層高まっているものと考えております。

震災から15年となります現在、当時の記憶を直接持たない世代が増え、記憶の風化が懸念される中、震災の記憶と教訓を次世代へ確実に伝え継ぐとともに、地域の実情に応じた事前防災の取り組みを着実に進めていくことが何よりも大切であります。本日のシンポジウムが東日本大震災の経験を改めて見つめ直し、次なる大規模災害から一人でも多くの命を守るための具体的な行動につながることを心から期待しております。

結びに、本日ご登壇いただきます皆さまの豊かな知見とご参会の皆さま方による活発な議論が、今後の防災・減災対策のさらなる充実につながることを祈念いたしまして、開会の挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

基調講演

「東日本大震災に学ぶ ～津波の脅威から身を守る～」



写真提供：朝日新聞社

今村 文彦（東北大学副学長・災害科学
国際研究所教授）

本日は貴重なお時間を頂いて皆さんと震災、特に津波について振り返らせていただき、日本と世界の中で地震・津波などのさまざまなリスクがありますので、一緒に備えていただきたいと思います。1時間という少々長い時間ではありますが、ぜひ聞いていただきたいと思います。



改めて、東日本大震災とはということで見ていただいておりますが、もちろん地震・津波、自然災害が複合的に連鎖的に起こり

ました。先ほどの挨拶にもありましたとおり、原発事故、原子力災害という第3の複合災害があり、今なおその対応が必要となっています。

さまざまな記録があり、われわれの頭の中に記憶されるわけですが、例えば言葉や映像、また映像の中でも色というのは比較的印象に残りやすいものだと言われています。ここにありますとおり、関東大震災では地震火災が発生しました。先日、首都圏の評価結果が出ましたが、多くは地震火災で、木密対応（地震発生時の大規模火災や延焼を防ぐため、「木造住宅密集地域」を「燃えにくく、壊れにくい街」へ変える対策）が必要です。こちらの絵図にあるとおり、赤のイメージだと思います。また1959年はわが国最悪の高潮被害をもたらした伊勢湾台風が発生した年で、広域水害ということで水色のイメージかと思います。

では、3.11の東日本大震災の色は皆さんの頭の中や記憶の中でどうでしょうか。いろいろな場所で問いかけさせていただいていますが、例えば津波の泥流の色、水が引いた後の瓦礫の色とさまざまです。また、原発事故、放射能に関しては色も臭いもないということで、その多様性が色という一つの切り口を見ても分かっていただけるかと思います。改めて東日本大震災は広域で複合的な災害であったということです。今後も大きな震災では複合性や連鎖性がありますので、揺れや津波だけではない様々なものが連鎖した状況に対応しなければなら

東日本大震災 複合災害

- Triple Disasters: ONE - 地震 The Earthquake
 - 発生: 2011年3月11日 March 11, 2011, 2:46pm
 - 地震規模 Scale: Mw 9.0 (1900年以降世界で4番目)
 - 関連・余震 2 Mw 5+ 地震 (黒印 X)
 - 1か月で400回以上
 - 現在も続く;
 - 2021年2月14日 Mw 7.3
 - 2021年3月20日 Mw 6.9
 - 2022年5月1日 Mw 6.8
 - 2022年3月16日 Mw 7.4

余震(誘発地震)は続く



TOHOKU

東日本大震災 復興支援

<http://koden.tohoku.ac.jp/>

IRiDeS

国際復興支援研究センター

震度規模は最大クラスのマグニチュード9で、世界4番目の規模です。これに加え、まだ皆さんも体験されている余震または誘発地震という言葉が適切かと思いますが、4年前の2021年に発生し、また3年前の2022年にはマグニチュード7クラスの余震が起きて新幹線が完全に脱線しました。実はこれに対する課題はまだあります。そういう意味で、まだこの震災の地震活動は終わっていないと言えます。

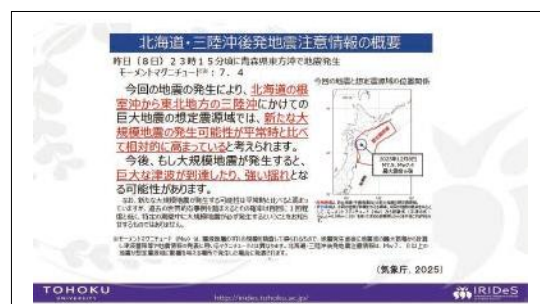


トレスが溜まっているかという研究報告がありました。平均400年に1回といわれている最大クラスですが、かなりエネルギーが溜まっているという、改めてショッキングな結果が出ているわけです。われわれはその余震と周辺のエリア、また当然南側でも発生していませんので、よく地震には活動期があると言われていますが、その状況になっていると思います。

歴史的にもこのような活動期がいくつか記録として残されています。例えば慶長や貞観時代の地震などは、東北でも記録が残されています。さらに、発生から2年が経った能登半島地震は逆側のいわゆる沈み込み帯のバックアークといわれている裏側ですが、大きな地震が頻発し、このスライドにはありませんが、実は南海トラフでも臨時情報が出されました。



改めてマグニチュード7.5を記録した青森県東方沖地震ですが、非常に注意しなければならない状況になっていて、この空白域の南端で地震が発生しました。夜中に発生したため、避難や対応において課題が残されたと考えています。その後の三陸沖地震では初めて後発地震注意情報が発表されました。



これは気象庁のスライドです。例えばこのエリアで新たな大規模地震が発生する可能性が、平常時と比べて相対的に高まっていると考えたとします。これは科学的には非常に正しい表現ですが、「相対的」、「平常時」とはどのぐらいかという、一般には理解しづらいものだと思います。

皆さんに特にお伝えしたいことは2011年3月9日に発生した地震です。11日の2日前、これが今回のような本震の前に起きた地震で、それにちょうど対応するのが今回の青森県東方沖地震になります。巨大な地震の前に前震が起きる可能性もあります。その可能性は、ここに書いてあるとおり、平常時と特別なデータを調べると確かに差がありますので、やはり注意喚起できたのではないかと思います。また、われわれは3月9日に何ができたのか、あの時に何かをできていれば、11日を迎えた時にわれわれは少しでもよい対応ができたのではないかということを反省しているところです。このような情報は確かに曖昧なところがありますが、しっかり点検したり、声掛けすることをぜひ実践していただきたいと思います。



そして3月11日に地震が発生し、大きな揺れが3分間続いて気象庁から津波警報が出ました。その後に避難指示等が出たわけですが、三陸では、地震の揺れから津波到達まで20～30分という一定の時間があります。これによって、命を守る行動である避難が一定できます。確かにあの時も、避難された方もいれば、避難が難しかった方

もいます。また後で見ていただく気象庁の情報によって避難を待ってしまった方もいます。また、避難を開始した方も車で避難は厳しかったですね。避難場所がハザードマップ上では安全がしっかり確保されていたのに津波に飲み込まれてしまった。いろいろな状況で今回の人的被害が出てしまったということを、皆さんと改めて確認したいと思います。



先ほど言ったように、気象庁は既に1992年から量的データベースということで、地震の情報を得て津波発生の可能性や高さ、到達時間等を発表しています。このデータベースは、あらかじめケースを与えていて、3.11のような今までにない巨大地震に対してはなかなか予測が厳しかったというのが当時の結果です。



では、具体的にどのくらい厳しかったかというと、こちらのスライドが示すとおりです。午後2時46分に地震が発生し、3分間揺れ続けました。気象庁が発生直後に発表したマグニチュード7.9というのはあまりにも過小な評価です。これは最初の揺れだけでマグニチュードを評価し、今回のような大規模な地震の場合は破壊が連鎖して時間がかかりますので、その実態を見る

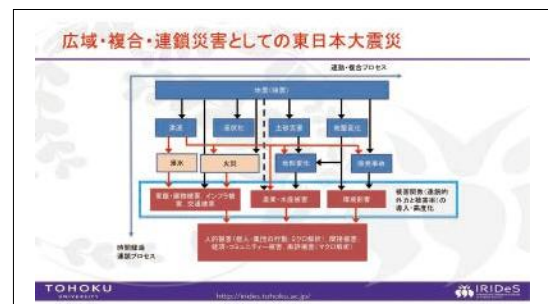
には残念ながら十分ではなかったということになります。もちろん過去の地震においてはそのような扱い、評価で十分だったのですが、例外であったということになります。

マグニチュード7.9とマグニチュード9の違いは、マグニチュードが1違うとエネルギーの差は32倍違うと言われていて、ざっと100倍、3桁違っていました。その結果、津波の高さが宮城で6 m、岩手、福島で3 mという第一報が出されました。特に岩手の3 mというのは厳しかったですね。なぜかという、防潮堤等が整備されていて、その高さが5 m、場合によっては10 mあることが住民の方や関係者の方にはインプットされているので、かえって安心情報になってしまいました。

その後3時14分には、同じマグニチュードのままですが、津波の高さの情報が変わりました。なぜ修正できたのかというと、沖合にGPS（全地球測位システム）波浪計が設置されていて、津波そのものを観測するシステムが動いていたからです。当時の国交省が整備したもので、第1波がちょっとした引き波で、その後6 mの津波の高さを示しています。沖合でのGPS波浪計ですので、この2倍、3倍が沿岸部での津波の高さになる。これを気象庁の担当者がすぐに判断し、データをアップデートしていったわけです。しかし、この時既に津波の第1波が沿岸部を襲っていたということになります。

これは、いわゆる災害情報のトレードオフということで、早い情報は非常に貴重でいろいろな対応ができますが、残念ながら精度は高くありません。これは南海トラフ地震や他の大規模の災害でも状況は同じです。メカニズムや観測、スーパーコンピューター等々があっても、残念ながら瞬時に適切なものは出ません。しかし、モニタリン

グなどの情報が得られるとだんだん精度が高くなっていきます。ここに書いてあるとおりトレードオフがありますので、われわれはどのタイミングで、どういう情報を得て行動したらいいのか、これはわれわれ自身で整理していかなければならないのです。現在、気象庁はこういうことがあるので、マグニチュード8以上の巨大地震の場合は、量的な情報を出しません。皆さん津波に注意してくださいというメッセージだけなのです。その上でどう対応するのが求められます。情報には限界があるということを改めて知っていただきたいと思います。



冒頭に述べた広域で複合連鎖災害を、非常に単純なフローですが書かせていただきました。皆さんが経験されたり、知っていただいているところではありますが、（災害は）揺れだけでは終わりません。沿岸部では津波や液状化もありますし、内陸では土砂災害もあります。地盤によっては隆起・沈降もあります。それが同時、または連鎖的に起きるのです。その結果、浸水、火災、変化、また事故対応が起きます。そして被害が出るのです。

こういう連鎖過程を見ていただきながら、基本的には事前の備えが一番ではありますが、そのプロセスの中で次の二次災害、三次災害に行かないような対応も今後考えていかなければなりません。しかし簡単ではありません。いつ起きるか分からない地震に対して、どのような対応ができるかということは、地域ごとに非常に丁寧に

見ていかなければなりません。しかしながら、われわれは起きてからもいろいろな対応ができます。また復旧・復興を早くするための幾つかのポイントがあると思っています。ぜひこのプロセスを頭に入れていただきたいと思っています。



津波は自然現象ですが、3.11の東日本大震災では、先ほど見ていただいたように外力によって影響した被害の実例を振り返りたいと思います。

まずは気仙沼の火災の状況です。多くは地震や津波の直後に大規模になったわけではなく、夜中であつたり翌日であつたりしています。地震火災に関する対応はかなり普及しており、3.11のときのいろいろな映像を見ましたが、直後に火災が発生したというのはかなり限定的だったと思います。しかしながら、津波が浸入し、水とともに火が出ているのです。これはわれわれにとって本当に意外なことです。

例えば電気がショートしたり、車から発火したり、各地でさまざまな原因で出火しました。しかし、大規模な火災ではなかったのです。その後、瓦礫とともにいろいろな種火が集まり大規模火災になってしまいました。その原因の一つが石油、燃料です。これが移動して、瓦礫とともに拡大したということです。今後このようなことが他の地域でも懸念されます。まずは石油タンク等を流出させないこと、そこから石油等を流出させないことが第一歩だと思います。また、もし仮に流出してしまった場合、瓦礫と一緒にならないようにする対応や、い

かに初期消火できるかが課題だと思います。

2年前の能登半島地震を思い出してほしいのですが、あの時も火災が発生しました。津波警報が出た時点では、市場の近くの火災現場が津波の想定浸水域に入っていたため、なかなか初期対応ができなかったという報告があります。津波がくる可能性がありますので難しい状況ではありますが、もっといろいろ対応ができたのではないかという検討もされています。

先ほどのように情報が曖昧な中、何ができるのかということは改めて慎重にやらなければなりません。例えばドローンを飛ばすとか、いろいろな衛星情報を使うとか、単なる予測だけではないリアルタイムの情報を得ることができますので、これらを活用することが重要だと思います。



二つ目が、黒い津波です。こちらも直後の映像が残されていてショックでした。宮古市役所の上から撮られた映像は元々動画で、堤防を越流したその瞬間の津波です。こちら側が閉伊川河口で、そのさらに向かい側がいわゆる地震が起きて津波が発生したエリアです。津波は波ではありますが、このように湾に入ったり、または広い平野部になると波から流れになって河川を遡上していきます。(津波が)泥(水)になっているのは全てのエリアではありません。宮古や釜石に共通するのは結構人口が多く、水産などいろいろな産業や生活のアクティビティが高い所では海底に泥や砂があって、それが巻き上がっているのです。

ちょうど4年前、NHKの記者で、気仙沼で黒い津波をペットボトルに残されていた方がいて、その分析を通じてこの黒い津波の実態、知られざる災害の実態を少しずつ解析してきました。まず密度が重いです。泥には有害物質が結構含まれていて、これが乾燥すると砂やほこりになります。それが復旧作業された方の肺に影響を及ぼすなど、複合的な影響がありました。この黒い津波を解析した後に、東京湾や伊勢湾でも同じような可能性があるかを調べたところ、その可能性は非常に高いと言えます。



この黒い津波は、津波の解析上において今まで考慮されていませんでした。基本的に津波は沖合の海底が地震によって押し上げられ、また水面が下がり、海水が入ってきますので、通常の水の解析で十分ですが、黒い津波は海底等の土砂を巻き上げます。その巻き上げに対応した解析が必要だということで、初めて土砂移動のプロセスを入れました。これは陸前高田の高田海岸ですが、その状況を見たわけです。

先ほど見ていただいたとおり、津波は海岸に到達した途端、破壊力を増し、巻き上げる変化がありますので、海岸そのものが消失してしまったのです。これは押し波だけでなく、海底地形にもよりますが、引き波の強さというのが非常に大きく影響します。当時の破壊された建物、土砂を巻き上げ、湾の奥または沖合に移動していきました。渦も生じています。渦の中にそのような瓦礫や多くの住民の方も飲み込まれた可能性があるのです。この地域は行方不明の

方が非常に多い場所です。陸側で搜索に尽力していただきましたがなかなか見つからない。恐らく海底に引き込まれた可能性があるということを解析データは示唆しています。

改めて将来の津波に関しては、先ほどお伝えした火災が起きる可能性に加え、重い泥やさまざまな瓦礫、漂流物が混ざった黒い津波が来るということをぜひ頭に入れておいていただきたいと思います。



この黒い津波は、仙台空港でも見られました。真っ黒というよりちょっと茶色いです。ヘドロではなく通常の土砂を巻き上げた状況になります。ここでは当時、駐車していた車やセスナ、ヘリコプター等が流出しました。



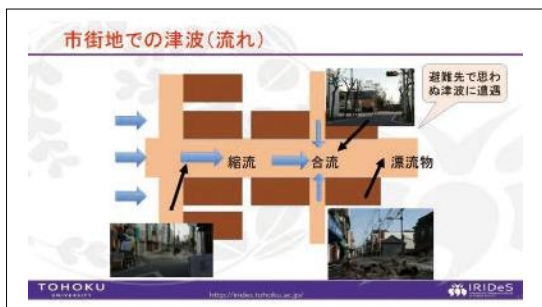
もう一つの特徴は都市型河川津波です。これは仙台港で、ここが多賀城市の砂押川です。津波が川を遡上してきます。このような都市型ですと、基本的に津波は海から来るのは変わりませんが、河川を遡上します。また陸上に上がった津波が道路上を流れますので、建物やそういう都市構造に影響されているいろいろな方向からやって来ます。建物間の流れだったり、ここでは縮流ということで、沿岸部では流れがそれほど

早くありませんでしたが、沿岸部から離れた広い道路などで、ものすごい早い流れに変化する状況が生まれました。



改めてその状況を分析しました。先ほど見ていただいたのは津波が上がったり下がったり、このような矢印でその流れの強さを示していますが、特に、色も含めて流れの強さも見ていただきたいです。津波が河川を遡上している状況、また奥から入ってきたもの、北側に向かっているもの、また西側に向かっているもの、ここにいる方はいろいろな方向から津波が来ます。実際このような目撃談が報告されています。基本的に避難は沿岸部から離れることで間違いありませんが、このように河川に沿った場所では津波が逆方向から来るかもしれません。安全な所に避難を開始していただくのですが、そこへのルートが安全かどうか点検していただかなければならない一つの事例だと思います。

この解析を多賀城の皆さんに見ていただき、その後は東京湾、川崎や横浜の皆さんにも見ていただき、避難計画をより丁寧に検討いただくよう伝えています。



こちらが縮流の状況です。海からの津波は一体化して来ますが、建物の影響を受け

て、一定程度津波を止めてはくれますが、逆にこの間に集中してしまいます。この「縮」という漢字が正しいかどうか難しいですが、土木の水理学の専門用語ではこのように集中する流れのことを縮流と呼びます。いろいろな方向から来ますので、流れが合わさり、本当に想像できないような複雑な流れとなって、思わぬ方向から津波と遭遇してしまうということをぜひ見ていただきたいと思います。



津波の姿は多様です。浸水とは水の塊が来ること、流れがあるため漂流物も生まれます。また、土砂、浸食、堆積等もあります。何とんでも被害を拡大するものはその破壊力です。これは浸水、水の深さと流れの強さの両方が関係します。そして、津波火災もあります。

誘因	素因	影響(拡大要因)	被害
浸水 (海水) Inundation	海水(塩分)、土砂移動、地形・土地利用	溺死(呼吸困難)、津波、大規模被害、浸食、堆積、海水植物枯	地域破壊、消失、農業被害
流れ Current	漂流物・船、燃焼物、地形・土地利用	破壊、浸食、津波、大規模被害、土砂移動	家屋・施設被害、インフラ被害、環境破壊
波力 Wave force	浸水×流れ ²	破壊力(破壊増)	家屋・施設被害、インフラ被害

いくつか状況とその素因ということで、この表では被害を拡大させるものと影響はどういうものがあるのかということをもとめています。これらは自治体の防災担当者の方にも見ていただいています。

3.11の津波災害の特徴は、被災地が443 km²と広域であることです。数字だけではピンときませんが、三陸側と仙台、また福島側の平野部ではこのような地域差もありま



す。人的被害に物的被害もあります。また漂流物によって被害が拡大します。当時沿岸部にいた14万台の車両が流されて、その後の復旧や生活に支障を来したことも報告されています。

これが気仙沼の移動してしまった船舶で、その周辺部では火災がありました。

これは女川の被害の状況で、建物自体は破壊されていませんが、建物の基礎部分を見ていただくと、本来、建物を支える杭があるはずですが、それが無くなっています。実は揺れと津波によって杭が破綻し建物を支持するものが無くなったため、建物は破壊ではなく転倒しています。このように当時の被災状況を一つ一つ見ることで、その影響の状況、また被害のパターンが分かりますので、今後の知見とさせていただきます。



さて、少しテーマが変わりますが、津波について基本的なところを共有していきたいと思います。津波の原因は地震が多いですが、実はさまざまな原因があります。過去400年間のデータを見ると、実は原因不明というののもかなりあります。地震や地滑りもなかったのに津波が来たというのがあります。一つは恐らく遠地津波もそうで

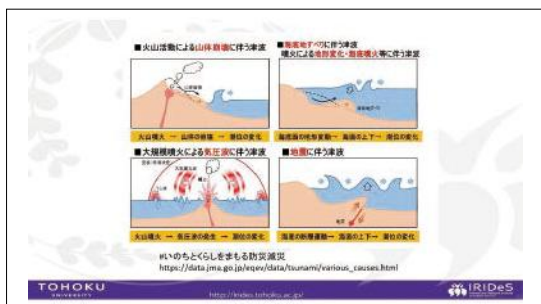
はないかと思います。チリや遠くで発生したものののですが、今はそれは分類できません。さらにいうと地すべりです。揺れが原因で海底や沿岸部ですべった場合もありますし、揺れがないまま起こる状況もあります。そして火山です。先日もありました。そして急激な低気圧発達による気象性の津波という分類もあります。



2011年以降、世界各地で津波災害がかなり報告されています。黒色が主に地震によって起こった津波になります。海外でもソロモンやチリ、インドネシア、トルコ等々でありました。水色がそれ以外のもので、グリーンランドは、今は政治的にも騒がれている所ですが、実は温暖化で氷河が解けやすい状況にあって地震か揺れのようなものがきっかけで崩壊して津波が発生し、ある集落がそれにのみ込まれてしまいました。ハワイでは火山、スラウェシ島のスンダ海峡や先日のトンガでは火山性の津波があります。能登や富山などでは地すべり性の津波もあります。

数えると世界で18例ありますが、このうち地震性でないものは7例ということで、先ほどの統計の数よりも多いということがいえます。ここで皆さんに理解いただきたいことは、日本では津波警報はありますが、先ほど来言っておりますように地震情報がきっかけです。地震があると津波注意が伝えられますが、地震以外による津波の警報は難しいです。もちろん今はトンガ周辺で火山が噴火しました、火山性津波に注意してくださいという情報は出ますが、

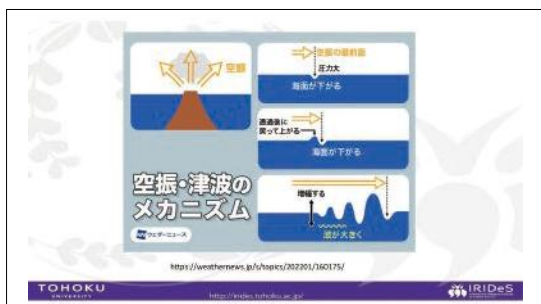
残念ながら正確で適切な情報は出ません。地すべりに関しては全く情報がないということになります。では、どうすればいいのかという質問を頂くのですが、完全に独立して地すべり等があるわけではないので、やはり通常とは違う揺れであったり、いろいろな状況が前兆としてはあるのではないかと考えています。



イラスト的にいろいろなタイプの津波を見ていただきたいと思います。先日、小学校・中学校の皆さんを対象に公開録音ということでエフエム仙台と勉強会を行いました。子どもたちはこのような複雑なものに結構関心を持って見てくれました。

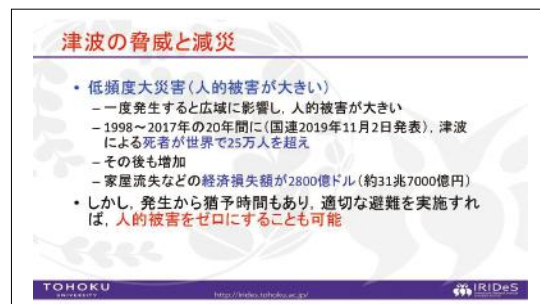


これがトンガの火山性津波です。4年前の1月15日ですが、土曜日の昼間に火山噴火が起きました。でも、津波に関してはあまり注意喚起がなかったのです。ところが、夜中にいきなり各地で潮位が変化して

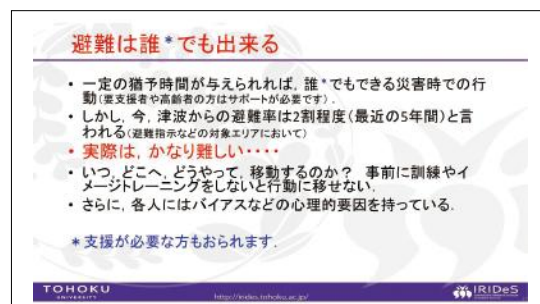


警報級になったのです。

火山噴火そのもので津波が発生したケースもあります。遠く離れた日本には空振ということで、気圧が大きいために水面を押し上げながらずっと伝搬し、日本やアメリカの西海岸、一部は地中海にも伝搬しました。これは陸も越えられるので、このような特別な津波もあります。

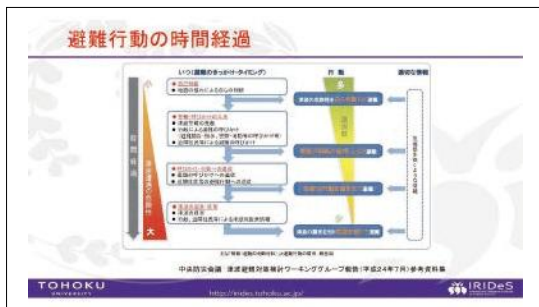


自然災害の中で津波は代表的な災害ですが、それにはきっかけ、原因があります。津波そのものだけが発生することはありません。いったん発生すると広域に影響して、人的被害は非常に大きいです。2004年のインド洋津波、また3.11も踏まえると残念ながら犠牲者が今までに記憶がない規模になってしまいました。しかしながら、一定の猶予時間がありますので、今回のテーマである適切な判断と行動が取れば、人的被害をゼロにすることができます。ただ、非常に難しいということは、3.11の時もそうですし、今も同じです。ですが皆さんと課題を共有していけば解決できると思います。



避難は誰でもできます。もちろん避難が難しい方もおられますが、特に自助に関してきちんと情報を得て、行動し、安全な場

所に避難し、かつ津波が終息するまでそこにいていただかなければ安全は確保できません。結構長丁場で対応しなければならなので、実際は簡単ではありません。このスライドを作った時は2割ありましたが、先日のカムチャツカ半島地震や青森県東方沖地震を見るともう少し厳しいかなと思います。自助の役割が大きいので、改めていつ、どこへ、どうやって移動するのかということを事前にイメージトレーニングや訓練しておく必要があります。頭だけの理解だけでは駄目で、行動に移せないといけません。



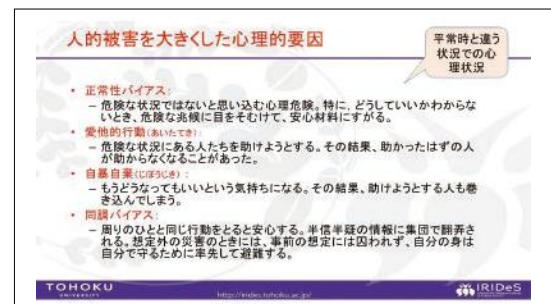
これが当時3.11の後に内閣府がまとめたもので、津波の発生から時間が経過すると津波の危険性がだんだん高くなります。初めの頃に早く判断すれば危険性が低い中で対応できますが、だんだん厳しくなってくるというプロセスです。先ほどの災害情報のトレードオフと同じで、状況がどんどん変わっていくということを頭に入れていただきたいと思います。



改めて、安全に避難が終了するまでがポイントです。実際に津波が来るまでの情報、もちろん警報等々もありますが、揺れや前兆もあります。先ほどの小学生・中学

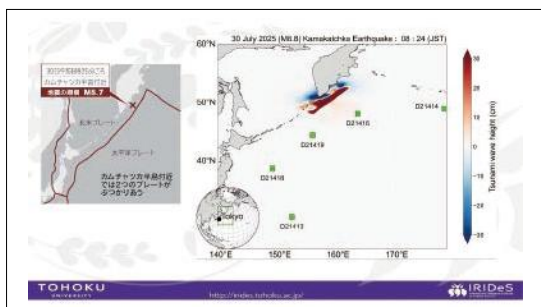
生の出前講義のところで、実は津波の前兆をちょっと紹介させていただきました。イメージしていただきたいのですが、数メートル、10mの波の壁が時速数十キロ、数百キロで沿岸部から来るわけです。音がすごいです。実はその水の壁に押されて風も吹きます。吹くという程度ではなくて、場合によっては突風になります。直前にはいろいろな前兆現象があって、昔の明治や昭和の三陸の方たちはそれを言い伝えることで避難をしたという記録もあります。今、そうした前兆は知識として得ていただきたいのですが、認知が難しい状況もあります。例えば、防潮堤がありますし、建物も耐震などで音響も外の音が分からないようになっているので、なかなかそれをキャッチすることが難しくなっていると思います。こういう情報が実はあります。

それを受けて、それが危険かどうかという判断、そして行動に移せるのか。また行動に移した後、手段はどうなのか。指定した避難場所は確かに事前のリスクとしては安全なのですが、そこはどうなのかということになります。ここにわざわざ下線を付しているのは、避難所と避難場所は違うということを改めて皆さんにお伝えしなければならいからです。避難所は滞在型の場所であり、緊急の命を守る場所は避難場所と呼んでいます。これは日本語の紛らわしいところです。こういうことも確認していただかなければならないと思っています。



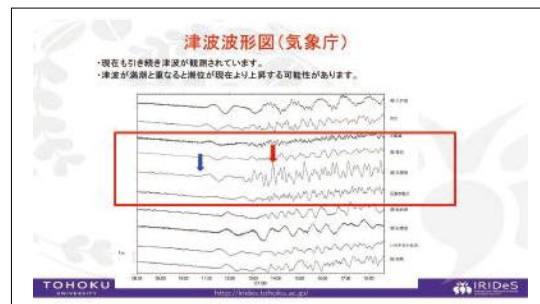
このあたりは矢守先生からお話があるかもしれませんが、われわれは心理的な要因

でなかなか行動が取れません。正常性バイアスは代表的です。愛他的行動（自分の利益や見返りを求めず、純粋に他者の利益や幸福を願って行われる行動）ということで、助けたい。もうどうしようもないので、せっかく助けに行った方も巻き込まれてしまうということが実際ありました。最後は日本人に多いのですが、同調性バイアス（「周囲の人と同じ行動や判断をとるのが正しい」と思い込んでしまう心理的な偏り）です。平時と違う状況下で複雑な心理状況になることを踏まえてわれわれは行動しなければならないと思っています。



避難に関しては、こちらで少し振り返らせていただきたいのですが、7月30日にカムチャツカ沖で地震が発生し、遠地津波になります。赤が押し波、青が引き波です。約2時間かけて日本に来ました。8時半ごろでした。いきなりスマホが鳴って皆さん驚かれたと思います。「今日は訓練があるの?」という声も学生から聞いたのですが、遠地津波でした。その後、マグニチュードの推定が変わり、警報レベルになってきました。

当時、先ほど見ていただいたように、ここから直接来る津波もありましたし、後でもう一回見ていただくと、この部分も約2時間かけて来ますし、逆にハワイから来たものがいわゆる海山に反射して日本にまた向かってくるということで、このように複雑で、長時間にわたり皆さんに避難をしていただかなければいけなかったということになります。



東日本大震災の時は寒い時期でした。2025年7月30日のカムチャツカ半島地震の時は猛暑でした。ですので、避難場所、避難先での課題が改めて出ていたわけです。これは気象庁の当時の状況で、これが第1波です。その後に半日以上、1日近く津波が続きました。もちろん津波の規模は1m前後ですので、いろいろな防潮堤等の施設がある所では本当の危険性はそれほど高くないのですが、例えば河川沿いや沿岸部にいる方は当然リスクがありました。



例えば仙台ではどう伝えるかということで、広報・監視用のドローンが初めて運用されました。先ほどのように海に行ったり、また家にいるときにその状況が分からないことがあります。そのときにアナウンスとして、カムチャツカ半島地震による津波注意報の発表は早朝8時でしたので沿岸部にはほとんど人がいなかったようですが、もし海水浴や釣り客の方がいれば、防災無線にプラス、ドローンでの呼びかけは有効だと思います。またこれにはカメラが付いているので、対策本部、消防本部で状況を確認することもできます。これは非常に有効だと思っています。

次に避難場所を考えなければいけませ



ん。これは東日本大震災の時の仙台東部道路の状況ですが、当時はここを使う許可を正式には得られませんでした。300名以上の方がこの道路に上がって助かりました。これを受けて、今では避難階段が整備され、避難してきた方を収容するスペースを設けて道路の中には入らないようにしています。これが震災後の改善で、さまざまな所で避難場所が用意されています。



避難タワーも同様です。寒い時期、また暑い時期、こういう建物が用意されると、そこで長期的な対応ができる様々な工夫が今はなされています。

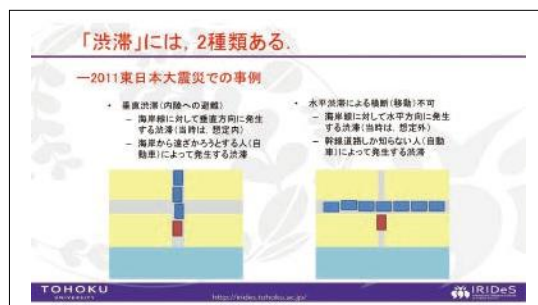


これが高知県黒潮町の津波避難タワーです。高齢の方がタワーの上まで上がるのは結構大変です。最近では訓練と体力を養成するためにも時々タワーの上まで上がっているということが結構言われていますが、あまり高齢になると厳しい。その中でどうす

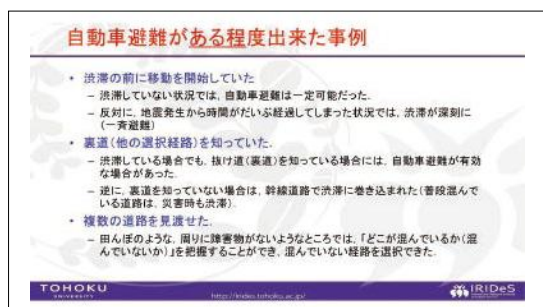
るか難しいということを現場で伺っています。



大きな課題は自動車での避難です。これは石巻の例ですが、図の赤や青の箇所が大渋滞になっています。沿岸部に主要道路があるので、どうしてもそこで渋滞が起きやすいです。大きな揺れの後の避難なので、道路は渋滞して信号も止まっています。この状況で大勢の人が車を使ったらどうなるのか、今でも想像ができます。



二つのパターンがあって、沿岸部に車が非常に多いのでそこで渋滞し、海から陸のところでまたさらなる二重の渋滞もありました。さらにこの先には避難場所、避難所があるのですが、自動車の収容台数を確認していないので、この間の青森県東方沖地震でもそうでしたが、皆さんが一斉に自動車での避難すると、途中の道路は大丈夫でも駐車場に入ることができません。その結果、危険な状況が続いてしまうということになりました。こういうことは地域で考えていただかなければなりません。自動車は諸刃の剣で、うまく使えば要支援者の方も迅速に移動していただけます。また車にはテレビやラジオ等もあるので情報収集できるということもあります。

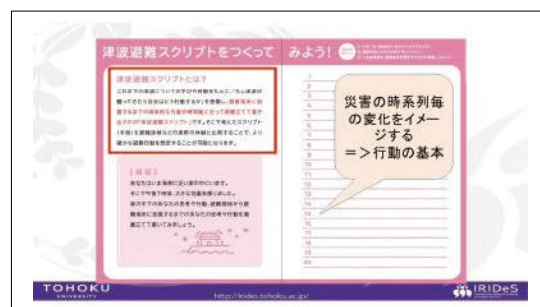


自動車避難ができた地域でもわれわれがヒアリングを行い、ポイントを見えています。まず混乱する前に避難を開始していただくとか、裏道などいわゆる避難する途中で判断できる知識を持っていたかとか、状況が許せたかとか、こういうものもあって、最終的にはやはり車を使うのは厳しいですよ。そういうのを見ていただきたいと思います。



最後ですが、改めて津波から生き抜き、生きながらえるためには、「じぶん防災」にさせていただかなければならないと思っています。もう10年前ですが、「じぶん防災プロジェクト」という冊子を作りました。できることを今しましょうというものです。今日お話しさせていただいた様々な資料を読んでいただくことも、できることにはなりますが、もう少し自分事化する、また具体的な避難行動に役立てていただくような作業を三つほど用意しました。

一つは、津波スクリプトを作ってみるということです。スクリプトとは台本ともいいますが、起きてからどんな状況があって、自分としてはいつ、どこのタイミングで何をしなければいけないのか、順序立てて書いてみるというものです。災害発生前



からその後の時系列的な変化を自分の中でイメージしていただきます。

これでまず、皆さんに「スクリプトを書いてみましょう」と言いますと、実はあまり災害の経験が多くなかったり、例えば小さな子ども、また小中学生ぐらいですと、書き出しがなかなかできません。経験であったり知識が限られているので、大体五つか六つぐらい書き出すともう想像がつかないということになります。例えば今日のような話を聞いたり、いろいろな状況を知っていただくと、ここもこういうものがあるのだなというふうに埋めてもらえます。ただし、状況によっては2番と3番を交代する、生じる時間帯が変わるものもあるということも、まとめとして見ていただくわけです。

このスクリプトを事前にイメージしていただくと、災害が発生してから一定冷静になりながら、自分の次の行動をイメージできるので、これがまたいいのか悪いのかという判断もしやすいのではないかと思います。すごくシンプルな作業ですが、このスクリプトを書き上げてみるということが重要です。訓練やいろいろな話を聞いた後、結構増えていくのです。より正確になりますし、ぜひお勧めしたいと思います。

もう一つが避難認知マップを作ることです。実際のまちの様子がこうで、ここに書き出している人がいるのですが、われわれの行動はわれわれの頭の中の記憶や判断でかなり決まっています。ですから、通常使っている道路や通常のまちの様子はインプッ

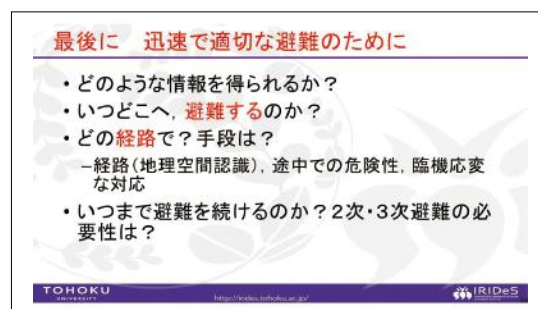


トされているので、それに沿った行動はやりやすいのです。突然の地震などで気持ち焦っていても、大体それに沿っていけばいいのですが、実際は揺れがあったり、いろいろな転倒があったり、被害や状況が違うので、ちょっとルートを変えようとしても、普段歩いていないため分からないのです。右側に行ったらどうなのか、左側に行ったら実は危険になってしまうということも瞬時にはなかなか難しいのです。

そういうところを少し改善していただくということで、まずは皆さんの頭の中にある認知マップを書き出してみませんかというものです。白い模造紙があればいいのです。一応、北と方向ぐらいは確認して、距離感も必要ですけれども、「とにかく今いる場所、自宅、また学校等から避難できる場所までを書いてください」「頭の中にある情報を使って書いてください」と言うと、これもまた書けないのです。普段通っている所ぐらいは書けますが、実は方向が結構間違っていたり、距離感が違っていたり、途中で危険な転倒しやすいものがあったり、河川があったり、実はここに行くと海に近づいているというのも実態としてはあるわけです。



これらが今持っているわれわれ自身が認知の中で持つひずみなのです。実際の地図とは違う距離感、違う認識ですので、これは改めなければいけません。このため例えば訓練やいろいろなワークショップをやっていただきたいと思います。それを何回か書き出し、自分の描いた認知マップを持って歩いてみると、実際とはこんなに違うというのが分かっていただけたと思います。これを自覚して修正していただくと、より正確になります。正確な情報は、より正確な行動につながります。このようなアイデアを冊子としてまとめているので、もし関心があればぜひ見ていただきたいと思います。



本日は津波から、またはさまざまな災害から命を守るためにというのがテーマです。私から東日本大震災での状況、また最近の津波の特徴と今後に向けてということで、避難の要点を紹介させていただきました。今現在も、例えば津波や洪水に対してどんな情報があるかというのも確認する必要があります。どんどん情報はアップデートされていて、今年6月に気象災害情報も変わりますし、ますます高度化しています。ただし、これを使いこなすことが課題だと思います。

それに加えて、地震、津波、災害は突然起きますので、どのタイミングで、どこへ避難し、どの経路が使えるかを決めておく必要があります。一つだけだと結構厳しいです。できれば複数用意しておきたいです。また、避難の手段として車を使うことには

課題があります。皆さんも頭の中では分かっていますが、青森県東方沖地震やカムチャツカ半島地震の時も車を使って避難していました。（車で避難しても）多分大丈夫だろうということなのです。これは、地域でルール化というか、話し合っていないことが背景にあるのではないかと思っています。改めて避難の手段は大切です。

あともう一つ、これまで触れていませんでしたが、避難指示の範囲は安全をみてかなり広域に設定されています。復興しているエリアには防潮堤等があり、安全レベルは高いです。ですから多くの方は、このレベルで避難しなければいけないのかと感じます。自治体の方でも避難指示のエリアをできるだけ細かく設定していただきたいのですが、細かければ細かいほど、緊急対応のときにこの地域の方はこうだという指示等も細かく出さなければいけません。これはトレードオフのような状態にあります。そういったことも皆さんと検討していかなければならないと思っています。

最後が大切なのですが、カムチャツカ半島地震や東日本大震災の時は避難指示等が1日半続きました。冬場や夏場に避難する場合、ちょっとした工夫によって、避難先での二次災害や体調を崩すことを避けられるのではないかと思います。津波による避難の場合は長時間になるということを確認しながら、自分の避難持ち出し袋プラス避難場所での備えをすることが大切です。避難場所に一番設置してもらいたいのはブルーシートです。やはり夏場は日陰になりますし、冬場の風も避けられますし、コンパクトですし、腐るものではありませんし、そういうものもぜひ設置していただき、そのときの状況に合わせて避難場所の環境を整えることが非常に重要ではないかと思っています。

以上で本日の基調講演としたいと思いま

す。ご清聴いただき、ありがとうございます。

朗 読

Team Sendai（仙台市職員有志の自主研究グループ）



写真提供：河北新報社

（籾内） 私たち Team Sendai は、仙台市職員などの自主研究グループです。東日本大震災発生後、多くの職員が混乱と不安の中、災害対応に当たりました。現場で見た

光景、迷いながら下した判断、心に刺さった言葉、そうした体験の一つ一つは公的な記録には残りにくいけれども、確かに今につながる大切な記憶です。私たちはその声を埋もれさせることなく次の備えにつなげたいと願い、さまざまな形で語り継いできました。本日は職員をはじめとする被災経験者の記録を、朗読という手法によりお届けします。当時の情景を想像しながらリラックスしてお聴きください。

最初にご紹介するのは、当時、名取市閑上地区で被災された40代、町内会長の体験です。津波で自宅もろとも流され、過酷な毎日を過ごされてきた彼の避難所でのエピソードをご紹介します。

「私が真に伝えたいのは被災地の現実だ」当時、名取市閑上で被災した40代の町内会長



写真提供：朝日新聞社

朗読：Team Sendai 鈴鴨 久善

地震発生の翌朝、私たち夫婦は自衛隊のボートに救助され、避難所での生活が始まった。体育館は隣との仕切りがなく、人からずっと見られている状況が続き、大変なストレスだった。最初はみんな「協力していこう」とか「頑張ろう」などと言っていた。だが、慣れない避難所生活。赤ちゃんが夜泣きをしたり、高齢者が夜中にトイレに行くたびに何度も起こされる。それが1週間、2週間、1カ月と続くと、次第に文句を言う人が出てくる。お母さんは真夜中に外に出て、寒い中で赤ちゃんをあやすようになる。お年寄りにはなるべくトイレに行かないよう、水を飲まなくなる。そして体を壊してしまう。

地震発生から2カ月が過ぎ、やっと避難

所から待ち望んでいた仮設住宅に移った。ところが、住んでみると狭い、暑い、寒い。そして隣の音が聞こえる。マスコミ報道のおかげで寒さ防止のための風除室ができ、断熱材を張ってもらい、風呂は追い焚き機能が付き、過ごしやすくなった。だが、どうにもならなかったのは狭さだ。夫婦と子ども3人の5人家族で借りられるのは、3畳間がたった2部屋。仕切りを払って6畳にしたが、まだまだ狭い。年々物が増えてくる。子どもだって体が大きくなる。ストレスがたまり、肘がちょっと当たっただけで大げんかになる。

182世帯が住んでいた仮設住宅は、6年目になると30世帯に減った。だが、空き部屋がこんなにあっても災害救助法の条件に合わなければ入れない。この法律ができたのは昭和22年だ。現状にそぐわない部分に対し声を上げ、法律を変え、次の災害に備えなければならない。さまざまな問題が被災地にはある。そして、この先も続いていくだろう。私はいわゆる語り部ではない。語り部は命の大切さを伝える活動をしているが、私が真に伝えたいのは被災地の現実だ。

(籾内) 次にご紹介するのは、当時、津波の甚大な被害を受けた仙台市若林区で保健所業務を統括した50代、担当課長の体験です。避難所には、命からがら逃げてきた被災者が殺到しました。劣悪な環境の中、被災者の命を守ろうと保健師たちがお互いにかかけ合った言葉がありました。

「アドレナリンが出る戦闘モードは3日が限度」当時、仙台市若林区で保健所業務を統括した50代の課長



写真提供：朝日新聞社

朗読：Team Sendai 佐藤 亜矢子

地震発生後、傘下16人の保健師を指揮し、若林区内の避難所に配置した。苦勞したのは、避難所の占有スペースの区割りだ。次々に避難者がやって来る。避難所内の少しでも良い場所を陣取ろうと、早い者順を主張し、言い争う声が聞こえる。一番居心地のいいのは体育館のちょうど真ん中ぐらい、入り口から遠い場所だ。トイレが近いと臭いし、隅っこはしんと冷える。高齢者がやっとの思いでよろよろと避難所にたどり着いた頃には、隙間風が吹き込むような寒い場所しか空いていない。そこで、誰をどの場所にどう配置するかを決めて体育館のレイアウト図を作ったものの、無視する人が出てきては大げんかになる。

私たち保健師は、「助かった命を大事に」を合言葉に保健活動を行った。インフルエンザやノロウイルスなど感染症の恐ろしさを避難者に理解してもらいたかったが、そううまくはいかなかった。例えば、避難所の土足禁止。津波で被災した自宅を見に行った人が、泥だらけの靴のまま避難所内を闊歩する。乾いた土ほこりが隙間風に舞い、食べかけの弁当の真っ白いご飯の上に

ふりかけのようにかかる。不衛生な状況にあっても、すぐに逃げるには土足の方が安全だと主張する人たちがいて、なかなか言うことを聞いてくれない。避難所内の土足禁止、占有スペースの区割りは、避難者が来る前に準備を終える必要がある。そのことを失敗から学んだ。

「ちょっと、アドレナリンが出まくってるよ」。保健師たちはお互いをセーブするため、常に声をかけ合った。使命感の強さからまさに戦闘モード。休まず、食わず、寝ずに頑張ろうとするからだ。しかし、それも3日が限度。徐々に感情のコントロールが難しくなり、表情や言動に変調が表れたかと思うと、がくんと一気にへたり込んでしまう。

よりどころになったのは、震災前、神戸の研修でもらった神戸衛生局の資料だ。そこで、私たちも若林区の活動記録をまとめた。保健師がどんなに汗をかき、寒い思いをし、食べるものもない中、懸命に保健活動を続けてきたか。それは保健師だけではない。現場の事実はなかなか伝わらない。公的な記録紙には汗や涙は出てこない。神戸から頂いたご縁とありがたさを胸に、私たちもこの体験を記録とともに次へと伝えたい。

(簗内) 最後にご紹介するのは、当時の仙台市長の体験です。普段、私たちは聞き取り調査の記録を基に朗読の原稿を作っています。けれども、この原稿は少し特別です。2013年、Team Sendaiが開催したセミナーでの市長の挨拶に深く心を打たれ、その思いをずっと語り継いでいきたいと願い、作り上げた原稿です。

「神戸から受け継いだバトンをもう一段上げて次へ」当時の仙台市長



写真提供：朝日新聞社

朗読：Team Sendai 柴田 恵美

神戸の皆さまには本当にお世話になった。東日本大震災発生の翌日、夜8時には神戸の先遣隊が到着。驚いたのは、神戸の方が「これを見ればこれからどんなことが起こるのか分かります」とどっさりと資料を持ってきてくれたこと。阪神・淡路大震災により得た知見を役立ててほしいという強い使命感を感じた。

それを見て確信した。災害対策本部長の私が今やるべきことは、震災体験のない自分が先が見えるようになるために、過去の災害記録を徹底的に読むことだと。すぐさま、ありとあらゆる震災の記録を集めるよう指示し、多くの本や資料が集まってきた。特に神戸のものは床から平積みで1mぐらい。私はこのものすごい量の記録を読み続けた。法律の本も読んだ。さまざまなことが見えてきた。災害法制というのは、これからこういう矛盾が起こるのかと。住宅支援といってもたったこれしかお金が出ない。津波は法律で何もカバーされていない。生活再建という言葉の裏側は数々の課題にあふれていた。

また、阪神・淡路大震災で国は、瓦礫の

処理費用は自治体の責任でという方針を打ち出した。当時の神戸市長は、そんな理不尽なことはないと最後の最後まで国と闘われた。日本の災害法制史や災害対応の歴史というのは、つじつまの合わない法律の中で起きてしまった災害を現地の住民と一緒に自治体が背負い、国と闘ってきた歴史なのだと。これで覚悟が決まった。自分も闘わなければいけないと。

神戸の皆さんは、あんなにも法律が不十分な中で闘ってこられた。そのおかげで災害法制が大きく変わった。例えば、被災者生活再建支援法、私たちは既にそれがあるという前提から災害対応が始まった。しかし、日本の災害法制で考えればもう一段上がっていかねばならない。それをするのが仙台市の義務だ。神戸が走り、仙台に渡してくれたバトンを仙台も全力で走り抜き、もう一段上げて次へと渡さなければならない。そういう気持ちを私に与えてくれたのは、阪神・淡路大震災のさまざまな経

験と数多くの記録であり、その記録を共有し、次に伝えようとする神戸の皆さんの強い志だと思っている。その気持ちがDNAとして仙台の中でも根付きますように。そしてまた、われわれも神戸のように貢献していきたい。

(籾内) 自然災害の多い日本では、先人たちは災害を古文書、石碑、遺構などさまざまな形で伝えてきました。しかし、それがどんなに立派な形であっても、ただ存在するだけでは伝わりません。民話や祭りなどのように人が人に直接伝えることで100年後、1000年後にまで伝えることができるのです。東日本大震災、私たちもこの貴重な体験や教訓をこれからも伝え続けていきます。その先の未来を守るために。

(鈴嶋) 人の口から。

(佐藤・柴田) 人の心へ。

(籾内) Team Sendai。



写真提供：河北新報社

パネルディスカッション

パネリスト：

- 矢守 克也 （京都大学防災研究所副所長・教授）
 佐藤 仁 （前南三陸町長）
 丹野 祐子 （津波復興祈念資料館「関上の記憶」代表）
 越中谷 郁子 （河北新報社記者）

コーディネーター：

- 御厨 貴 （ひょうご震災記念21世紀研究機構研究戦略センター長／東京大学名誉教授）



写真提供：河北新報社

御厨 貴 皆さまもご承知のように、今年
 は2011年の東日本大震災の発生から15年
 目になります。東北の地域報道を担う河北
 新報社の共催を得て、今年は仙台でシンポ
 ジウムを開催することとなりました。

先ほど今村先生からお話がありましたよ
 うに、三陸沖を震源とするマグニチュード
 9.0の東北地方太平洋沖地震が発生し、東
 日本の太平洋沿岸に大津波が押し寄せ、こ
 れに原子力発電所の事故が重なるという未
 曽有の複合災害となったわけでありませ
 ぬ。死者・行方不明者は2万2000人余、家屋

全半壊が40万6000棟超、これは大変な被
 害と言えると思います。

東日本大震災から15年ということで、
 私もある折に復興構想会議の議長代理に
 なって、いろいろと取り組んだわけですが、
 それからもう15年、復興構想会議のとき
 に一番問題になったことが、やはり今日も
 出ているように感じます。まずは道路、鉄
 道、住宅といったインフラについてはほぼ
 復旧したのかなという形ですが、被災者
 の方々の心の復興の問題、あるいは地域の
 コミュニティがいかに再生されていくかとい

うことについては、今でも時間がかかっている状態です。先ほどの今村さんのお話にもありましたが、その影響はずっと続いていて、復興で必ずしも元に戻るわけではないですが、「良かったね」というような安心の言葉が出るところまではいかないのかなという感じです。

ここからは津波の問題、「津波から命を守るために～東日本大震災15年・次の巨大地震への教訓」をテーマに議論を進めていきます。最初に先ほどご紹介されました4名のパネリストの方から、15年前の東日本大震災、そして15年前からずっと続いている経験から一体何を学んだらいいのか、どういうふうにその教訓を伝えていったらよく伝わるのか、そのみならず、この15年間で皆さんにぜひ話ししておきたいと思われることを、お一人10分を目処にまずはお話しいただきたいと思います。

まずは矢守克也様からお願いしたいと思います。



写真提供：河北新報社

矢守 克也（京都大学防災研究所副所長・教授）

矢守 克也 関西から参りました京都大学の矢守と申します。どうぞよろしくお願いします。



今ご覧いただいているスライドやお手元の資料に概要は書かせていただいたので、今村先生のお話、それから Team Sendai の皆さんの朗読などをお聴きした中で感じたことを含めて、画面で見えていただいているものとは違う自己紹介をして、その後内容に入ろうと思っています。

今年は東日本大震災から15年、阪神・淡路大震災は先日1月17日で発生から31年を迎えました。私も阪神・淡路大震災の被災者の皆さんと、語り継ぎの活動、語り部グループをもう20年以上やっています。その中の一番若いメンバーは、あの日生まれの人です。つまり、今度の1月17日で31歳になりました。そのような当時おなかの中にいたメンバーから、当時おなかに自分の子どもがいた母親、それから子どもを亡くした親、親を亡くした子ども、そういったさまざまな経験をしたメンバーと共に阪神・淡路大震災のことを語り継ぎできました。今となって思えばその多様性がすごく大事だったように思います。

そして30年たった今、先ほど子どもを亡くした親と言いましたけれど、その方は次男さんを亡くされていて、その親御さんは十何年語り継いでこられました。それを見ていた三男の方が新たに数年前に語り部グループに入ってくださいました。つまり、少しずつプレーヤーを替えながら、あの日を忘れないで語り継いでいこうという動きは今も神戸で続いている

ます。恐らく東北もそうになっていくだろうと思っています。

今日一度も出ていない言葉に南海トラフ地震があります。次の大きな地震がどこで起こるのか、それは誰にも分かりません。今村先生も分からないわけですが、その一つの候補が南海トラフ地震です。先ほどTeam Sendaiの皆さんから、神戸から受け継いだものをすごく大事にしてくださいというお話をしていただきました。私たちは東北・仙台の地から学んだことを、南海トラフ地震という西日本で起こるかもしれないとされている大きな地震・津波に向けてつないでいこうとしています。

これまでの訓練・リスクミの課題 ＝「逃げトレ」開発のポイント

- ・【診断】成功／失敗：逃げ切れたのか、まずかったのか。「判定」「診断」ができない避難訓練って、いったい何だ？
- ・【主体性】いつ逃げるか、どこに逃げるか、どこを通過、だれと逃げるか。そのすべてを、実際に逃げる本人が決めない（工夫できない）避難訓練って、いったい何だ？
- ・【多様性】いつも同じシナリオ（たとえば、最大クラスの想定）で、「もし...だったら」を試せない避難訓練って、いったい何だ？

時間もないので一言で結論を言います。今日のシンポジウムのタイトルは「津波から命を守るために」です。このゴールに向けて、今一番普通に行われている対策は避難訓練だと思います。逃げるといことです。その避難訓練を大きく見直す必要があるのではないか。これが結論です。少し問題提起風というと、今行われている避難訓練で、東日本大震災のような地震・津波が襲ってきたときに「本当に命を守り切れるのだろうか」という大きな疑問が私どものチームにはあります。

そして東日本大震災の直後から国から大きな研究資金も頂いて、今画面で見えている三つの大きな問題を抱えていると私が思っている避難訓練を、今より少しでも良いものに変えるためにということ

で、避難訓練支援アプリ「逃げトレ」というものを作りました。



これはスマートフォンのアプリであり、研究費で作ったので、どなたでも無料で今すぐダウンロードしていただける形で、AndroidおよびiPhoneのストアに置いています。もし興味を持ってくださった方はぜひダウンロードして見ていただきたいと思います。ただ、今日はリモートの方もいらっしゃるの、この話をしましたが、残念なことに現段階では南海トラフ地震対策用に作っているので、東北あるいは北海道沖で起きる地震・津波には対応していません。主に茨城県以西、鹿児島県以東の海岸沿いで使っていただくということになります。

このアプリの最大の特徴を一言で言います。防災対策の基本は、常に言われますが敵を知り己を知ることです。先ほど今村先生が、主に敵のことをお話くださいました。「こんなふうに津波は来ます」「こんなふうに浸水してくる可能性があるのです」と。それに対して私たち人間の側はどんな避難行動パフォーマンスを示せるのか。その二つを同時に見比べないと、恐ろしい津波から逃げ切れるのか、逃げ切れそうにないのかということは決まりません。敵と味方の両方を一度にスマートフォン上で可視化、見える化するためのツールとして「逃げトレ」を作りました。

「逃げトレ」をダウンロードしていただ

き、海岸沿いでスタートボタンを押していただきますと、スマートフォンを持って皆さんが、あそこがどうも避難タワーだと目を付けていただいた所に歩いて、あるいは走って移動していただくと、皆さんの移動した跡がスマートフォンの画面、地図上に出てきます。こんなふうに皆さん動いていきますよという跡が出てきます。そして、その後ろを津波が浸水してきます。この津波はもちろん現実のものではなくて、現時点で想定されている南海トラフ地震において、その土地にとっての最悪のシナリオで推定された津波が陸上を遡上してくる。つまり、皆さんが避難場所に向かって逃げていく後ろを追いかけてくる様子をオンタイムでご覧いただけますし、逃げ切った後にこんな様子だったのかというふうに、自動的に動画が保存される仕組みになっているので、見ることができます。

これによって、逃げ切れたか、今の逃げ方では危なかったのかが判定ができるのです。もちろん正確な判定はできませんが、今の避難訓練に一番欠けていると私が思うことの一つは、結局「逃げてみただけ」になっていないかどうかということです。今のルートで、今のスピードで今の避難先に逃げたとして、それが○なのか×なのか、○だとしてもぎりぎりだったのか、こういうことに関する情報がまるっきり得られない。こういう避難訓練ではなくて、しっかり自分のパフォーマンスと津波の現状を見比べて評価できるような避難訓練をしないと、これから先、本当に人の命を守るというゴールに、いわば本気で向かっていることにならないのではないかと思います。

先ほどの挨拶の中で一部登場した、内閣官房で検討されている防災庁のキャッチフレーズの一つが「本気の事前防災」であり、「本気」という言葉が付いています。今ま

で本気ではなかったのかというところちょっと語弊がありますが、本気という言葉に込められたのは、これまでになかったような災害をちゃんと念頭に置いて、私たちは本気で取り組もうとしているか、という問いだと思います。阪神・淡路大震災から31年、東日本大震災から15年たった今こそ、あの災害で亡くなったお一人お一人のことを思い浮かべて、私たちは本気で次の大きな災害から人を守る、それに向けてみんなの気持ちを結集して最大限の努力をしているのかということを、この際もう一度問い直すことが必要ではないかと思っています。

御厨 貴 ありがとうございます。次は佐藤さん、お願いいたします。



写真提供：河北新報社

佐藤 仁（前南三陸町長）

佐藤 仁 前南三陸町長の佐藤です。今日はお招きいただきましたことに厚く御礼申し上げます。ご案内のとおり、南三陸町は壊滅いたしました。壊滅した町の復興事業も、3年前にはほぼ全て終了することができました。コミュニティの問題等さまざまな課題はあるものの、インフラ部分の復興については成し遂げることができ

たと思っております。今日は復興庁の方もいらっしゃいますが、復興庁の皆さん、宮城県当局、そして全国の自治体の皆さん、ボランティアの皆さん方に大変お世話いただきましたことに、この場をお借りして心から厚く御礼申し上げたいと思います。



南三陸町長を11月5日に退任しまして、翌11月6日から、写真にありますように南三陸311メモリアルというところの特別顧問を務めさせていただいております。このメモリアルには三つの目標があります。一つは感謝を皆さんにお伝えする場所、もう一つは震災を伝承する場所、そして三つ目が一番大事で、防災を学ぶ場所ということにしています。

ここにはプログラムが三つあります。レギュラーは1時間かかり、ショートバージョンは15～20分ぐらいですが、これをご覧いただきながら、そのプログラムには全部町民が出てきます。震災を受けたときに自分がどういう行動をしたのかということがずっと語られますが、その途中で何か所か、今ご覧になっている皆さんに「この方々はこういう行動をしましたが、あなたはどう行動しますか」という問いかけをしてきます。防災を学ぶという意味においては大変有意義な場所だと思いますので、ぜひ皆さんにお越しいただきたいと思います。

南三陸町の震災で犠牲になられた方、行方不明の方々は831人です。そして住宅、商店、工場が流出したのは6割強ということで、町はほぼ壊滅状態でした。



そういった中で南三陸町の創造的復興の一丁目一番地は、ご覧いただいているように「生業の場所はさまざまであっても、住まいは高台に」ということです。三陸沿岸は津波の歴史の場所であります。南三陸町はこの120年の間、明治28年、昭和8年、昭和35年、今回の東日本大震災と4回も大きな津波が襲っており、そのたびに命が失われ、財産が失われる状況が続いておりました。この一丁目一番地にわれわれが込めた思いは、もう二度と津波で命や財産を失わない場所をつくろうということです。そのために何をするかというと、高台移転をしようということです。高台を造成し、全ての住宅をそちらに移す、そういう町をつくろうということに決めました。

ただ、震災前に皆さんがお住まいになっていた場所というのは、それぞれの皆さん方の先祖伝来の土地です。そういう場所をもう二度と住めない災害危険区域に指定するということになるので、町民の皆さんほぼ全ての方々から同意を得なければなりません。従って、震災から4カ月目の7月末、1週間で23の会場に、被災した町民の皆さん方にお越しいただき、説明会を開催しました。その内容はただ1点、「高台移転をします。よろしいですか」という説明会を23会場でやりまして、ただの一人も反対はいませんでした。まだ震災の思い、自分で見た災害が頭の中にこびりついているときであり、二度と同じ思いをしたくないという思いがあったので、皆さんは反対しなかったのだらうと思います。1年あるい

は2年かけて説明会をすれば、当然時間もたってくるし、思いもだんだん薄れてきます。そうすると、「やはり自分の土地はそのままにしてそこに」という思いを話す方々がたくさんいらっしゃると思います。が、早い時期に説明会を開催して本当に良かったと思っています。

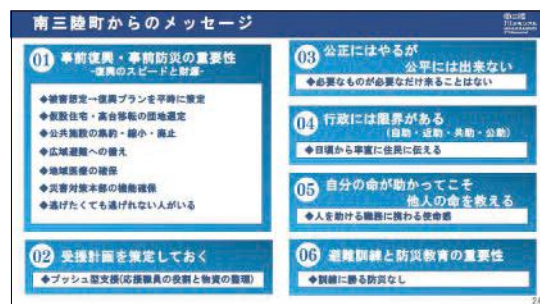


これが高台移転をした写真になります。ここは志津川地区という南三陸町の中心になりますが、低地部の方で被災した方々向けに高台に3カ所、団地を造成しました。こちらの方に皆さん方にお住まいいただいています。従って、昔住んでいた低地部は公園、あるいは一部かさ上げをして商店街や工場を造るということになります。

震災前、われわれは津波注意報・津波警報が出ると夜中でも朝でも昼間でも荷物を持って高台に避難するという生活をしていましたが、高台移転をすることで、皆さん夜は枕を高くして安心して寝ていただける、そういう町を造れたと思っています。確かに油断してはいけませんが、安全・安心な町を造れたと思います。

4年前になりますが、日本海溝・千島海溝で最大級の地震が起きたときの津波のハザードマップの見直しがかかりました。かなりの地域で東日本大震災よりハザードマップの浸水面積が広がりましたが、当町で高台移転した場所には幸いなことにかかりませんでした。もっといえば、東日本大震災で想定外なことが起きたわけですから、このハザードマップよりもっと大きい津波が来たとしても、今の家からすぐ上の

方の高台に逃げていくような場所がありますので、皆さんには安心してこの場所に住んでいていただけるということになると思います。



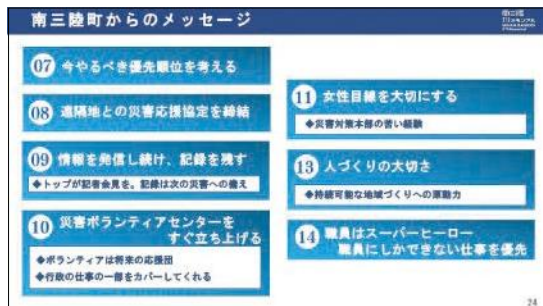
今、すべてうまくいったように話をしていますが、失敗もありましたし、反省もありましたし、教訓もありました。さまざまなことを踏まえながら、15年目を迎えたと思っています。まず、先ほど先生からお話がありましたように、防災庁が11月にできて、本気の事前防災、私たちは13の項目を掲げております。こういうことを皆さんで考えましょうというのをしていますが、この中で一番大事なことは事前防災です。事前防災に普段からしっかり取り組むことが非常に大事だと思っています。

細かいことは時間がないので言いませんが、二つ目には受援計画を策定しておくことです。発災当初はプッシュ型で人の支援や物資の支援がどんどん入ってくるので、これをどう交通整理するかという受援計画をしっかり作っておくということです。

3番目に、公正にはやるが公平には絶対にできません。そして行政には限界があるということの日頃から町民の皆さん、市民の皆さんにお話ししていくことが大事だと思います。

そして、自分の命が助かってこそ他人の命を助けることができますと思います。

それから避難訓練に勝る防災はないと思いますので、日頃からの避難訓練、運営対策をしっかり講じておくことが非常に大事だと思っています。



次になりますが、災害のときには十人十色、百人百色、いろいろなことがやってきます。そのときに、今やらなければならない優先順位は何かというのをずっと考えておりました。そういうことを考えておくと、ある意味対策的にあまり失敗はしなかったという思いがあります。

南三陸町は災害応援協定を近隣と結んでいましたが、東日本大震災では全く機能しませんでした。今は九州などの遠隔地と災害応援協定を結んでおります。

そして災害ボランティアセンターをすぐ立ち上げる、将来の応援団に必ずなってくれるので、こういったものが必要だろうと思います。

それから、女性目線を大切にできなかったことは私の大失敗です。災害対策本部をつくったときに、電気もない、水道もない、職員も体育館で雑魚寝です。そういうときに女性を連れて来るのはかわいそうだということで女性を入れませんでした。女性をしっかりと入れないと、高齢者の方々、赤ちゃん、障害者の方々、こういった方々への目配りができないと思いました。これは本当に反省でございます。

そういったことを踏まえながら、事前防災ということの日頃から皆さんにぜひお考えいただきたいと思います。以上で私からの話は終わりたいと思います。

御厨 貴 ありがとうございます。それでは、続きまして丹野祐子さん、よろしくお願いいたします。



写真提供：河北新報社

丹野 祐子（津波復興祈念資料館「関上の記憶」代表）

丹野 祐子 よろしくお願ひします。私は皆さんのお手元にお渡しするような資料を用意しませんでした。というのは、私が撮った写真がほとんどで、個人情報ばかりなので、申し訳ありませんがこの会場で見ただけになります。私は普段語り部の活動をしていますので、ぜひ耳を傾けていただければ幸いです。

私は普段、宮城県仙台市の一つ南隣にある名取市の関上（ゆりあげ）という町で活動が続けています。多分、今日初めてこの漢字を目にした方もいらっしゃると思います。ぜひ覚えて帰ってください。

東日本大震災が発生する以前の関上は2,500軒の家があり、5,000人の暮らしがあった町です。私は生まれ育ちが仙台市です。仙台から嫁に来て平成6年、私は名取市の住人になりました。平成8年に娘が生まれ、平成10年に息子が生まれました。2人の子どもに恵まれ、毎日笑って楽しく暮らしていたのです。

でも今から15年前、東日本大震災が発生し、私の暮らしていた町は全壊という形になりました。私たちが住んでいた家、主人の実家があった場所は全てが瓦礫という言葉に変わってしまいました。

15年前の2011年3月11日、あの日は娘の卒業式でした。全校生徒がたった150人しかいない小さな閑上中学校、3年生48人での卒業式、この写真の中に私の娘も写っています。卒業式が終わった後、私は当時子どもたちと一緒に謝恩会を開いていました。お弁当を食べてわいわいがやがや、にぎやかに過ごしていたとき、地震が発生したのです。今も余震が後を絶ちません。でも、宮城県は昔から地震の多い場所、いつか必ず大きい地震が来る、そう言われて私も大人になりました。ある程度の対策はしていたつもりだったのです。そんな対策など何の役にも立たないほど、あの日は大きな大きな揺れでした。でも、揺れた後、まさかあんなに恐ろしい津波が来るなどということは私の頭の中に全くなかったのです。揺れが収まれば、片付けが終われば、また明日会えばいいやと思っていました。だから、謝恩会を開いていた仲間に「気を付けてね」と軽い気持ちで手を振って別れたのです。別れた後、家の中はぐちゃぐちゃでしたが、片付ければ何とかなるだろう、そんな程度だと勘違いしていました。「今晚のご飯、どうする？」「今日は卒業式、夜はごちそうを食べよう」、そう思っていたのです。電気が付かない、水道が出ない、どうやってご飯を炊こう、どうやって片付けるか、そんなくだらない話をしていたら、時間などあつという間です。

1時間6分後、私たちの町を最大で高さ9mの津波が襲ってきました。私はたまたま公民館と呼ばれる建物のすぐ近く、娘が隣、近所の人が周りにいっぱい、ちょっと離れた所に息子、そんな状況で避難していました。「津波だ」、誰かが大きな声を上げたとき、私は建物の2階に駆け上ることができました。でも、ちょっと離れた所にいた息子の姿を見失ってしまったのです。津波が来るほんの数分前、私は息子にこんな

言葉をかけました。「大丈夫、閑上に津波なんて来ないから」、そう嘘をついてしまったのです。

地震の後、近所の人が集まっていました。「大丈夫だ。おらほのどこになんて津波なんて来たことねえ」、みんながそう口々にしていたのです。過去に大きな津波の経験がないから大丈夫、そう勘違いをしていました。でも、私たちの町は被災地、そして私は被災者と呼ばれるようになりました。さらには中学1年の息子、主人の両親、家族3人を失い、大切なもの全てがなくなってしまったのです。

中学校はかろうじて建物が残っていました。こっそり忍び込んだのです。

息子の遺品が何かないと探しました。家が流されて、わが子の写真もビデオも母子手帳も全てが瓦礫です。教室に何かないと毎日のように通いました。黒板に「ありがとう」「楽しかったよ」、こんなメッセージが書かれていたのです。うれしかった。

今ここに息子の姿はありません。でも、ちゃんとここにいた、誰かが忘れずにいてくれる、そう思うとうれしくてうれしくて、勝手に献花台を作りました。震災から半年後です。

この献花台を作ったことがきっかけで、子どもたちの慰霊碑を建てることになりました。今ここに姿かたちのない14人、ちゃんと生きていた、名前を残そう、そう思ったのです。私たち親が死んでも、東日本大震災をみんなが忘れても、間違いなく14人はここに生きていた、わが子への愛、それがこの慰霊碑になりました。

慰霊碑を建てたことで、語る場所、「閑上の記憶」が生まれました。

今ではこんなにたくさんの仲間にも恵まれ、あの日を語り続けています。なぜ語るのか、それは歴史は必ず繰り返すからです。きっとまた同じことが起きます。だから、

私たちは語り続けます。本当は語り部という人間は要らないのです。二度と災害が起きなければ、語る必要はありません。でも今、語れる場所は正直あまり多くはありません。

多くの人が閑上地区に来てくれます。何も残っていないのです。震災遺構が何もないからこそ、私たちは言葉であの日を語り続けます。そして「語る場所がない」、そんなことを言うてくださる方に、私たちは語る場所を提供しています。ぜひTeam Sendaiの皆さん、朗読に来てください。語る場所、私たちの建物があります。また去年、クルーと呼ばれる仲間と一緒に広島に行き、80年語り継ぐ先人に学ばせていただきました。神戸に、広島に、そして沖縄に、多くの学びがあります。私たちはこれからも先人の背中を見続け、そして歩き続けようと心に誓いました。

昨年の年末は、クルーの皆さんと気仙沼に行きました。最初は数人でしたが、昨年は40人もの参加者がいました。驚くべきは小学生がいるのです。あの日生まれていない子どもたちが共に学びたい、そんなふうに私たちと一緒に歩き始めました。

残念ながら、私たちは民間企業です。歩みはゆっくりゆっくり、そして楽ではありません。でも、私はこの場所を守り続けたい、今もそう思っています。ぜひ皆さん、応援をよろしくお願いいたします。

今、閑上は大きく景色が変わりました。私がかさ上げの町で暮らしています。

でも、この町を見て、たった15年前に何があったのか想像できる人は決して多くはないはずです。だからこそ、景色の変わった町で私は今日も語り続けます。

3月11日に追悼のつどいを開催します。ハトの形の風船にメッセージを書くのです。

高い高い空、天国に届けたい、お母さん

の子どもに生まれてくれてありがとう、そんなメッセージを届けたいと思っています。ぜひお時間の許す方、3月11日に「閑上の記憶」に足をお運びください。お亡くなりになった星野仙一さんは、「天国からふる里を！」というメッセージを私たちに下さいました。柳田先生も「天まで届け」という言葉を私たちに届けてくれます。現地に来られない方には、ハトの出前もしています。全国の方がたくさんのメッセージをくれています。

ぜひ最後に一つ、私の自慢の息子を紹介させてください。生きていれば28歳、残念ながら永遠の中学生、13歳、平成10年2月23日生まれ、丹野公太。私は息子を語るために今も語り続けます。地震や津波を語っているつもりはありません。息子が教えてくれた、命がこの世で一番大切であるということ、命以外大切なものは何もない、こんなことをこれからも語り続けます。

間もなく震災から15年、節目という言葉を使う方もいますが、正直私には節目という言葉を使うことはできません。わが子が生まれ変わらない限り、私の東日本大震災は終わりません。2月23日は天皇誕生日で、国民の祝日です。天皇陛下の誕生日とともに、わが子の誕生日を今日この会場にいる皆さんに祝ってもらえたら、私がここにきた意味はあると思っています。

ご清聴、誠にありがとうございました。

御厨 貴 どうもありがとうございました。それでは最後になりますが、越中谷郁子さん、よろしくお願いいたします。



写真提供：河北新報社

越中谷 郁子 記者

越中谷 郁子 河北新報社教育・防災連携室の越中谷と申します。よろしくお願いいたします。私は「震災を知る 備えの一步に」というタイトルでお話しさせていただきます。



ある中学3年生が、こんな文章を書きました。Team Sendai さんには及びませんが、ちょっと読ませていただきます。

「両親の話によると、東日本大震災が発生したとき、1歳3カ月の私は両親と一緒に宮城県東松島市のスーパーにいた。揺れが収まった後、石巻市の内陸部に避難。避難所の石巻市須江小に身を寄せて2日ほどたった後、仙台市青葉区に住んでいる母の姉が車で迎えにきてくれた。当時は東松島市野蒜に住んでいたが、それからは母の姉の家で避難生活を送ることになった。

どうしてかという、海に近かった野蒜の家は津波で全壊してしまったからだ。母

は「お父さんが『津波が来るから家に戻るな』と言っていなければ家に戻っていた」と明かす。母と私は父の適切な判断と言葉に救われた。

家族は震災を忘れないように毎年3月11日、野蒜を訪れている。自宅があった場所は、農地になった。私はまだ小さかったので、暮らしていたころの記憶はない。それでもそこに立つと、不思議なことに本当に流されてしまったんだという実感が湧いてくる。

その後、必ず海岸にも立ち寄る。普段は、波が穏やかでとてもきれいな海だ。東松島市震災復興伝承館で見たことのある、津波が何もかものみ込む海の凶暴な一面が信じられない。

地震、津波だけでなく、日本では毎年、豪雨災害が起きている。山形県を流れる最上川をはじめ各地で川が氾濫しているほか、土砂災害も相次ぎ、犠牲者が出ている。家族の震災の教訓から、災害の危険が迫ったら自分や自分がいる場所は安全だという思い込みを捨て、素早く判断、行動することを心がけたい。

災害時は助け合いも大事だ。避難所に行ったとき、たくさんの人たちが、毛布を貸してくれたり、ストーブの近くに座らせてくれたり、小さな私を気遣ってくれたという。伯父も寒い中、おむつを歩いて買ってきてくれた。

避難所だけでなく、普段の生活から幼児を連れていたり、お年寄りや困っている人を見かけたりしたら、思いやり、助けることができるような人になりたい。」

実は、これを書いたのは私の長男です。後で詳しく紹介しますが、弊社の「かほく防災記者」研修に参加した際に書きました。研修の課題に、家族や自分の被災体験や家庭で取り組む防災対策などを調べて発表するというものがあります。彼は何も

聞かず、一人で書き上げました。私も発表のときに初めて聞いたのですが、そのときに、「ああ、この子はちゃんと受け止めてくれていた」とうれしくなりました。普段から話していることが彼の心にちゃんと伝わっていたことが分かり、とても安心したのを覚えています。



河北新報社では、震災の教訓をつないでいくために、さまざまな取り組みを行っています。その一つが先ほど紹介した「かほく防災記者」です。中学生を対象に行っております。災害の伝承と防災の担い手育成を目指します。被災地の視察を行うとともに、家族と一緒に家庭での備えや避難訓練に挑戦し、防災記者として新聞記事を書き、最後に「マイ防災新聞」という自分のオリジナルの新聞を完成させます。本年度は5期目の研修が昨年12月に終わり、それぞれすてきな防災新聞を完成させました。

研修生が家族と取り組む「私が主役の避難訓練」は、ここにいらっしゃる矢守先生が高知県で実施された個別避難訓練から着想を得て実施しています。これまで総勢68人が研修を終え、防災記者として地域で活躍しております。



河北新報の事業の中の代表的なものに

「むすび塾」というものがあります。これは、地域の実情に合わせて住民とフランクに防災について語り合うワークショップという形を取っています。県内はもちろん全国各地で行っていて、既に125回を数えています。本年度は長野県の松本市、先月も石巻市の湊中学校で開きました。

自分で自分の命を守り、生き残って他の人を助けるには、やはり災害のこと、避難のこと、その後の生活を知ることが大切になってきます。もう既に小学生は震災のことを知りません。昨年8月、「むすび塾」の特別編として、小学生の親子を対象にした防災キャンプを松島町と共催という形で初めて企画しました。「あの時こうだったよね」という親の話を聞きながら、一緒に備えについて話し合い、避難生活を想像してみる機会をつくりたいと思ったからです。何かしら記憶に残れば災害が発生したときに先の見えない不安が少し和らぐのではないかと、右往左往する大人の中で行動できる力になるのではないかと、そんな思いもありました。

松島町が備蓄するアルファ米を使ってご飯を食べたり、災害用のトイレを使ってみたり、避難所となる体育館で簡易ベッドを組み立てたりというふうに、親子でわいわい取り組むことができました。実際に体を動かしたことは、実感として心に残ると思います。参加したある小学生は、「地震は怖いけれども、どう行動したらいいか分かれば不安が少し減る」と話していました。この事業は来年度も継続していこうと思っています。

私は2022年に、今の部署の前身である防災教育室に配属されました。3.11の被災体験は先ほど長男が書いたとおりですが、私は当時育児休業中で、被災したために育児休業を延長させてもらいました。ですので、一番大変だった時期の新聞製作や報道に携

わっていませんし、これまで自分自身の経験を語ったことはありません。防災教育室に配属されるということで、震災と改めて向き合わなければいけない、さまざまな感情が湧き上がることは予想できました。

ただ、私は心残りが一つありました。長男も書いていたのですが、避難所で息子のために周りの方はとても良くしてくださったのですが、その皆さんにちゃんとお礼を言うことができませんでした。ずっと心に引っかかっていたのですが、この部署に来て防災事業に携わることで、形を変えて何か恩返しができるかもしれない、そんな思いもあります。

そしてもう一つ、避難した翌日に誰かが河北新報の朝刊を持ってきました。何かとんでもないことが起こっていると、みんなが不安で不安で仕方がなかったときでした。すると、避難所にいた人たちがその朝刊に群がったのです。その光景に新聞の意義や役割が凝縮されていたと思います。私はその光景が今でも忘れられませんし、その後の私の、河北新報社の社員としてのモチベーションになっています。



これは防災キャンプを報じる翌日の特集記事です。



本日2回目の「実は」なのですが、これまでいろいろ話してきましたが、私は実は防災事業のメインの担当ではありません。皆さんはNIEを聞いたことがありますでしょうか。「教育に新聞を」という取り組みのことですが、それを主に担当しています。小中高校に伺って、新聞の活用方法や新聞の作り方をよく出前授業をするのですが、その中で石巻市の桃生中が防災にも熱心に取り組んでいるのでご紹介させていただきます。

桃生中は石巻市でも内陸の方であって、特に防災意識が高いというわけではありません。そこで1、2、3年生全員が学年ごとに毎年、県内の震災遺構を訪ねて語り部の話を聞いています。それで終わりではなく、学んだことを新聞にまとめて、市の防災訓練のときに地域住民に発表するということをしています。新聞を作って人に伝えるにはきちんと理解しなければいけません。生徒は真剣に取り組んでいるのです。地域住民の方からも、中学生の話を聞いて自分たちも備えなければいけないという反応が返ってきたと伺いました。

小学生にも伝えなくてはいけないということで、子ども新聞のように分かりやすい言葉を使ったり漢字にルビを振ったりして、新聞が年々進化しています。「震災を実際に経験していない中学生でも学んだことを伝えることができる。震災を知ることが備えの第一歩、それを伝えることの大切さを生徒たちは学んでいる」という校長先生の言葉が心に残っております。

以上、私の話を終わります。ご清聴ありがとうございました。

御厨 貴 どうもありがとうございました。これで4人の方から最初に、今日お話しになりたいことの要点をお話いただいたわけです。パネリストの皆さんは、15

年前の東日本大震災を契機にその後の被災地の支援活動を精力的にそれぞれの分野で取り組まれてきたわけですが、そうした支援活動、あるいは報道ということも含めて、最も大変だった、今考えてみるとそれを克服するのが大変だったという点が、多分一つや二つではないと思います。それを絞って言うとは一体何だったのか、それらを通じて、克服、あるいは克服できないまでもそれらを改善していく中で、どのようなことにお気付きになったのか、それをお話しいただきたいと思います。矢守さんは言い足りなかった部分を付け加えて、まずお話しください。

矢守 克也 私は東日本大震災の被災地でこれまでずっと活動してきたわけではありませんが、東日本大震災を受けて南海トラフ地震が想定される地域で取り組んできたことの中から大変だと思ったこと、そして少し光が見えてきたかなと思っていることをお話しします。

これはいろいろなところで既にご紹介していることでもあるのですが、二つの短歌を紹介しながらそのことをお話しします。2011年3月11日から1年と3週間後の2012年3月末に、東日本大震災の被害を受けて南海トラフ地震の新しい想定が公表されました。2012年3月31日のことです。その想定で、全国最悪の津波想定、これは津波の高さという意味ですが、その場所が高知県黒潮町という所です。何と34mもの高さの津波が来るかもしれないという想定でした。これらの想定は、大きな地震・津波が予想されるので対策を進めてください、皆さん訓練なども積極的にやってくださいという趣旨で公表されています。最初の短歌は黒潮町にお住まいの当時80代半ばの方が作ったものです。私はその後、この方とお友達にもなりまして先月も電話し

たところ。その方は、今は90代になりました秋澤さんという短歌を作るのが趣味のおばあちゃんが作った短歌で、こんなものです。

「大津波 来たらば共に死んでやる 今日も息(こ)が言う 足萎え吾に」。「萎え」というのは弱っているという意味です。息子さんと一緒に住んでおられて、こんなに大きい津波が来るなど青天の霹靂である。80年間もいい所だと思って黒潮町に住み続けてきたのに、そんな津波が来るのかと。自分はもう足が弱ってしまっている。実際に杖を突いて何とか歩けるぐらいの体調の方です。その私に息子が「一緒に死んでやるわ」と言っているという歌です。説明するまでもなく、諦めや絶望といった気持ちが歌われています。

そこでの問題意識あるいは大変だったことは、災害に関する想定というのは、もちろん対策を進めるため、備えを加速させるために発表されるのですが、伝え方を間違えると、あるいは伝え方が十分でないと、全く逆効果になることもあるということです。一方、逆の影響を及ぼす場合もあります。ここまで津波が来るというラインが決められると、その少し外側の方は大丈夫だと思ってしまうこともあるからです。いずれにせよ想定というものには、このような意図せざる落とし穴のようなものがあります。特に南海トラフ地震、黒潮町の場合は想定される津波が非常に大きかったので、この大きな想定を前向きなものとして受け止めていただくためにどうしようかということを考え続け、地域の方、地元自治体の方と取り組んできたこの15年というわけです。

中身は省略しますが、先ほどのアプリなどもその取り組みの一つとして作りました。あのアプリだけではないのですが、他にも黒潮町役場の方、住民の方がたくさん

努力を重ねられて、おばあちゃんの短歌もその後変わりました。それがどんな短歌なのかというと、こんな短歌です。「この命落としはせぬと足萎えの我は行きたり避難訓練」。先ほどの短歌に比べて随分前向きなものになりました。

そして気持ちだけ前向きになったのではなくて、このおばあちゃんも、高知県では2014年、ご存じないと思いますが伊予灘地震という地震や、南海トラフ臨時情報が初めて発表された日向灘地震など、黒潮町でも近年、体感できる揺れを伴う地震、あるいは津波注意報が発表されることがあって、その際いずれも家族の方と一緒に実際に避難をされています。ですから、気持ちの上で、短歌の上で前向きになったというだけではなく、本当に行動も変わってきています。

一人のおばあちゃんの例でしたが、これと同じようなことが人口約1万人の黒潮町でも少しずつ育ってきています。南海トラフ地震はいつか来ますが、そのXデーを1個目の短歌のようなマインドで多くの方が迎えるのか、それとも2個目の短歌のような気持ちをみんなが持って迎えるのかでは、政府の想定にもあるとおり、プラスマイナス何十万人という犠牲者の差となって表れます。

私は今日、そういった自己紹介をあまりしませんでした。私の専門は心理学、情報学です。先輩に当たる今村先生のように自然科学の観点から津波をしっかりと理解することとともに、防災対策に当たっては人間の側についても、まだまだ研究したり、研究者、自治体の方、住民、ボランティアの方、みんなが一緒に取り組むべきことは多数あります。みなで取り組んでいけばどんな岩盤のような重たい課題も少しずつですが解消していくのではないかと思います。

御厨 貴 分かりました。それでは佐藤さん、どうでしょうか。高台移転に懸けた情熱と、その移転を非常に短い期間でやったので成功したということ为先ほどおっしゃっていましたが、あの高台移転というのは、少なくとも東日本大震災の復興にあたっては国もかなり力を入れてやったと思うのですが、もう少し広げたところでそれをどのようにお考えになるのか、それも含めてお答えいただけると幸いです。よろしく願いいたします。

佐藤 仁 高台移転の話をもう少し詳しくということですが、実はちょっと綱渡りでした。震災の翌月に私は高台移転をしようと思いました。なぜかという、災害対策本部のあった体育館の小ホールが遺体の安置所だったのです。毎日そこに行って、私は手を合わせました。地獄でした。この地獄は二度と繰り返しては駄目だと思いました。この地域にまた津波が来るのは当たり前だと思っているので、何とか高台移転をしようと決めて、方向性を決めたのです。

ところが、先ほど少し説明しましたが、町民の皆さんもほぼ反対なしだったのですが、綱渡りだったのは、当時、国の財政支援が全く決まっていなかったのです。御厨さん、ご承知ですよね。一次補正があって、二次補正があって、二次補正は当時の菅直人首相がある意味保身のためにやって、本格的に決まっていなかったのです。うちの町は6月から復興計画の策定会議を立ち上げて、9月には復興計画ができました。ところが、財源の支援の中身が全く決まっていないため、復興計画案のままでした。地元の国会議員の先生が小野寺五典先生なので、私から何とか全額国費でやってもらえないかという話をずっとしていました。

なぜかという、震災復興計画が始まる前に、当町はざっくりどれぐらい再建資金

がかかるのかを試算しました。国の事業、県の事業、町の事業、全部をひっくるめて3000億円かかるのです。当然、激甚災害指定になるのは分かっていたのですが、5～10%の地元負担があるので、3000億円の10%という300億円の負担になります。震災前の当町が自由にできるお金は、1年間で1億～2億円が精いっぱいです。300億円の借金を背負うと、1億円ずつ300年払い続けなければいけません。

それで小野寺先生に、「何とか全額国費でやってもらわないと、再建しても町が破綻する」とお話ししました。まだそのときは自民党が野党だったので、小野寺先生が私に、「明日の衆議院の予算委員会で町のことをやりますよ」という話になって、衆議院予算委員会を見ていたら、今の立憲民主党の野田さんが総理大臣で、南三陸のパネルを作って質疑してもらったのです。野田さんが最後になって「分かった。全額国費で行く」ということでスタートしました。それでやっと高台移転を進める方向性になったのです。

私は表向きは弱音を吐きませんでした。ただ、腹の中では本当に全額国費で行けるのかということをやっと心配していました。そういう関係もあって、数年間でしたけれども、全額国費ということで、あとはまた町の負担に戻りましたが、それほど大きな負担にはならなかったのが助かりました。そういうさまざまな制度の壁があって、それにぶつかりながら、どうハードルを越えるかというのを十数年間ずっとやってきたというのが実態です。

御厨 貴 ありがとうございます。私は当時復興構想会議にいたので、国がなかなか動かないということで、東北の首長さんから随分突き上げを食らったのをよく覚えています。しかも、予算措置の時期がどん

どん延びるのです。最終的には、冬になってようやくいろいろなお金が出たのです。のんびりしているなと思いましたが、それぞれの町の首長さんに「ようやく出ましたよ」と言いに行ったら、「これから雪だぞ。雪が降ったときに復興とは何を考えているのか。冬に金をもらったら春まで工事ができないんだから。そういうことを国は何も考えていない」と言って、国と一緒に怒られたことを今思い出しました。なかなか一朝一夕には行かないのを、この15年でよく変わってきたと思いますが、あの当時は本当に大変だったなというのを、今の佐藤さんのお話を聞いて思い出した次第です。

それではどうでしょう。丹野さん、一番大変だったところは多分先ほどお話しいただいたのかなという気もするのですが、もう少しそのあたりをお話したいと思っています。よろしくお願いします。

丹野 祐子 正直何が大変だったのかといわれると、これというふうの一つ言葉にするのはすごく難しいですが、なかったことにされたくないという思いで実はこの15年ずっと歩みを続けてきました。町がきれいになってそれで終わりなのか、なかったことになるからそれでおしまいなのか、なぜ私はここで語り部をしているのか、なかったことにされたくないという思いが今も、多分これからも私の原動力だと思います。

ニュースを見ました。先週の阪神・淡路大震災から31年、昨年、阪神・淡路大震災から30年目は、兵庫県内の50カ所でいろいろな式典が開催されたということを知りました。今年31年目は20カ所減って、30カ所での開催になったそうです。ある人が言っていました。「30年を機に語ることをやめた。もう語り続けることは限界だ」、そんな言葉を聞かされたのです。

私も30年が限界だろうと思っています。そう考えると、東北は今年で15年目、つまり折り返し地点なのです。ここが踏ん張り時だと思っています。なかったことにされたくない、次にどうバトンを渡すのか。ですので、河北新報さんが「むすび塾」など若い世代、次の世代に扉を開いてくださることはとてもうれしいことです。

正直、私は自分のスタート地点が2011年3月11日だと思っていたのです。でも、昨年広島に行って、大学生の語り部さんに原爆が落ちる以前の広島の写真を見せてもらいました。私は産業奨励館、通称原爆ドームと呼ばれるドームの屋根の色が緑色であるということを去年初めて知りました。広島の人たちは、それが当たり前だったようです。私は自分が被災した2011年3月11日がスタート地点だと思っていましたが、そうではなくて、私にも震災の前があった、子どもたちが小さくて、アンパンマンの服を着て、毎日笑って自転車に乗って追いかけていた。そんな当たり前の日常があるということも伝えていかなければ、次の世代にバトンを渡すことは難しいと初めて気付かされました。

今日この会場にいる多くの方々やオンラインを聞いている方々は、私がどういう立場で語り部をしているのか多分想像できると思います。15年前を知っているからです。でも、15年前を知らない人は、「誰？このおばちゃん」と思うのです。だから、私にも普通のあなたと同じかわいい小学生の時代があって、そしておばちゃんになって、子どもを育てる立場で初めてわが子の命が永遠ではないということに気が付いた。そのことを共に伝えていかないと、何か他人事の話の聞いている、自分には関係ないと思われてしまいます。

私は阪神・淡路大震災のとき、燃える神戸の街を見ながら、大変だなと他人事だっ

たのです。中越地震でも、ヘリコプターで牛が吊り上げられていくのを見ながら、中越の人たちは大変だと完全に他人事でした。あのとき本当は自分事として考えていれば、地震のときはどこに避難するとか、地震の後は津波が来るのだということを学んでさえいれば、わが子の命を亡くさなくて済んだのにと、そう考えれば考えるほど自分が悔しくてたまりません。

だから、この年になって初めて学びたいと思いましたし、伝えなくてはいけないと今改めて思っています。同じ思いをもう二度と誰にもしてほしくないから、わが子の命が永遠ではないということを分かってほしいから。子どもが亡くなるという思いをする親はもう私だけでたくさんです。南海トラフ地震でたくさんの命が失われないように、東日本大震災の経験を次に伝えること、それが多分、私が今ここに生きている意味であると思っています。ですので、先生方にもお力をお借りして、「閉上の記憶」という語れる場所をこれからも守り続けていきたいと思っています。

御厨 貴 ありがとうございます。では続けて越中谷さん、先ほどのお話の続きになると思いますけれども、報道を続けていくことの意味、それをまた少し深掘りしてお話いただけるとありがたいと思います。

越中谷 郁子 なかなか難しいお題だと思いますが、継続するしかないと思います。河北新報で防災事業をやったときは、必ず紙面に載ります。そして翌日の朝刊だけでなく特集という形で大きく1ページ、11日などの日付の日に掲載させていただきます。やはり新聞は記憶する、記録することが役割としてあると思うので、それを継続するしかないのかなと思います。

「かほく防災記者」の子たちもそうです

が、自分が新聞に載るということは、結構地域の方々も読んでくださったりして声をかけてくれるわけです。そうすると、その子たちにとってはうれしいことなのです。その繰り返しもあって、その子たちももっと発信しよう、もっとこういうことを防災記者として記事を書いてみようというモチベーションにもつながっていくと思うので、新聞という媒体を最大限に活用していただいて記録し続けることが大事なのかなというのが、この事業に携わってよく感じることです。

御厨 貴 ありがとうございます。要するに、継続は力ということだと思います。先ほど丹野さんが言われた、自分事として考える、よそ事ではないのだというところと、恐らく継続は力というのは多分どこかで交差するところがあると今伺っていて思いました。

次に皆さんにお願いしたいのは、今日のポイントは何といても津波ですが、津波から逃げる行動について矢守さんから随分いろいろ言っていただきましたが、多分まだ語り終えていないというか、言いたいことがまだたくさんあると思います。津波から逃げる行動をどう定着させるか、先ほど高齢者のお話がありましたし、子どもを含めて避難訓練が多様化していかなくてはいけないのだろうという気がするのですが、その辺を含めてお話しいただけるでしょうか。

矢守 克也 ちょうど話し足りないかなと思っていたところを質問してくださり、誠にありがとうございます。今日は「逃げトレ」という機械を使ったプログラムについてお話ししましたが、私は何も機械やITを推しているわけではなく、もっとアナログで地道な活動というか、むしろそちらの

方が大事だと思っています。

例えば今日の資料の最後のページにいろいろ書いていますが、少しだけ例をお話すると、私どもは10年間ぐらい子どもたちと一緒に、そういう意味では「むすび塾」にも来ていただいた高知県四万十町という所の海沿いの小さな学校で、子どもたちと津波避難のことをずっと勉強、訓練してきました。東北もそういう所が多いと思いますが、子どもの数が減って数年前に閉校、廃校になってしまいました。

そこで始めたのが防災リハビリ教室という週1回のプログラムです。これにやって来るのは、80年前にこの小学校に来ていたようなおじいちゃん、おばあちゃんを中心です。その防災リハビリ教室のキャッチフレーズは、「動ける体が一番の防災グッズ」というものです。意味はもうお分かりだと思います。もちろん佐藤前町長がおっしゃっていたように高台移転、つまり逃げる必要がないというのが理想です。私も本当にそう思います。そういう所も高知県で少しずつ増えてきました。ただ、残念ながらそうでない所は逃げる必要があります。そのときに、自分で逃げる体力があるということが一番の防災グッズだという意味です。

高齢化はどんどん進む一方で、待ったはかけられません。人間だから誰しもいつかはあの世に逝くのですが、あの世に逝くその日まで歩けることは可能といえば可能で、実際にそういう方もたくさんいらっしゃいます。おじいちゃん、おばあちゃん、つまり80年前の小学生の皆さんに呼びかけて、避難訓練をやるときに何かやろうというのではなくて、いろいろ心配かもしれませんが、毎週1回でいいので、1時間ぐらい体操をやったりします。ここにはちゃんとプロの方に来ていただいています。リハビリとか看護師さんなども来てくださっ

ています。そこで事故があつては何にもなりませんので、やる前に血圧を測ったりしています。先ほどTeam Sendaiの方からお話のあった保健師の方などにも協力していただいています。

そして季節に1回ぐらい、ちょっとした体力測定をするのです。その体力測定が実は津波避難行動力を測っていることになっています。福祉関係の分野では有名なのですが、6分間連続歩行というのです。なぜ5分間ではなくて6分間なのか、僕はあまり理由は分からないのですが、6分間測っている間に何メートル続けて歩けたかを測るという測定です。

70代、80代のおじいちゃん、おばあちゃんたちも随分頑張ってくれて、普通そういうお年の方は体力がだんだん落ちてくるのが当然ですが、中には体力が上がる方もいらっしゃると思います。3カ月前は250mだったけれど、今回は280m歩けましたと。こうやってある程度の時間続けて歩く力というのは、津波避難にとって非常に有効です。いろいろなデータがありますが、東日本大震災のときも歩いて逃げた方が結局何メートル歩いて、あるいは何分間歩いて避難したかというデータがあるのですが、大体10分程度歩いて、距離にして300～400m進んだというような避難の方が多いです。

高齢者の避難という一番の課題を考えるときに、既に歩く力がなくなった方々をどう助けるかということももちろん大切で、こうした仕事もやっています。しかし高齢化は今以上にどんどん進んでしまいますので、これ以上歩けない方を出さないこと、行政的にいうと防災と健康福祉行政のハイブリッドの政策というのは、今後の津波防災、特に津波避難を考える上で一番重要かなと思って、3年ぐらい前からこのプログラムを始めています。これも実はお話ししたかったので、補足させていただきました。

御厨 貴 今のお話ですが、佐藤さん、どうですか。歩けない老人をなくすということ自体が要するに防災、まさに津波から守る話とも結び付くというところ、これは多分15年前には出なかった発想だと思います。あのときに出ていた発想は何かというと、とにかく津波が来るから一人で逃げろ、つまり自分一人は助からなくてはいけないから、周りの人のことなど考えずに自分だけ走って逃げろ、じいさん、ばあさんがいたら一緒に手を組むのではなく自分だけ逃げろということがかなり言われました。そういう教育をしなくてはいけないのだと言っていたことを、当時の復興構想会議の議長代理としてよく覚えているのですが、その辺のところを少し話を膨らませるとどんな感じになりますか。

佐藤 仁 なかなか難しいですね。基本的に歩いて逃げるが大前提ですが、そこにはそれぞれの体力的な問題もあって、それがかなうのかかなわないのかというのを一概に論ずることはなかなか難しいと思います。

ただ、歩くということについて面白い話があるのは、実は青山学院大学が駅伝で初めて連覇した渡辺君という選手がいるのです。彼は今30歳を過ぎているのですが、ランニングと防災を一緒にしたプログラムを考えているという話で私のところに来了のです。「ランニングと防災か」と話をすると、要するに判断力を含めて総合的に防災とランニングを結び付けたいという話で、3月14日に青山学院大学の現役の駅伝選手が来て、仙台の大学か何かを会場にしてやるのです。私は渡辺君に防災アドバイザーを頼まれていたので、基本的にはいいですよという話をしてセットでやることになったのですが、何せ3月14日は15年目でさまざまな事業やイベントが入ってい

るので「今回は行けない」と言いましたら、2月になってから渡辺君と対談したものを当日の会場で流しましょうということなので、先生が今言ったような走って逃げる、歩いて逃げるということと防災をいろいろな形で結び付ける動きが出てきたと思いました。

御厨 貴 ありがとうございます。これはなかなか面白い。今のお話、矢守さんはどうですか。

矢守 克也 ありがとうございます。佐藤さんのおっしゃるとおりで、私の発想は、健康づくりと防災は結び付けるというよりもほとんどイコールになりつつあるのですが、もう少し若い世代の方は、もちろんスポーツやランニングと防災とを結び付けて、あるいは一緒のものとして考えていくというプログラムを発想していただいています。

特に防災業界で今一番問題になっていることの一つは、毎度出てくる次のような議論です。こういう場にお集まりいただいたような方はOKですが、防災と聞いた途端に背を向けるような方も世の中にはたくさんいらっしゃいます。そういう無関心層にどうやって防災の方を向いてもらうか。これまでのように「今日は防災訓練です」とか、こういう場に來ていただいている皆さんに言うのは何ですけれど「大切な防災の集まりですから來てください」と言うのではなくて、青山学院大学のランニングというのはブランドもありますので、そういうスポーツ選手のお話も聞けますよということで、実は防災の話も入っているとか。

私の防災リハビリ教室も、おじいちゃん、おばあちゃんたちは、仲間がたくさん來るので茶飲み話も楽しみに來るのです。看護師さんなどが來てちゃんと血圧も測ってく

れるし、健康チェックもしてくれる。そのときやる体操が、実はいつか來る南海トラフ地震のときに、他人に助けてもらわずに自分で逃げることでできる私をつくるのに役立っているという立て付けになっているので、同じような発想かなと思った次第です。

御厨 貴 ありがとうございます。越中谷さん、どうですか。報道の方とすると、こういうものとの関連性みたいなものは何かできますかね。またむちゃ振りでしょうか。

越中谷 郁子 ちょっと難しいですけども、そういうところに子どもたちを加えられないかと、ちらっと思っています。やはり子どもがいると、大人は「やらなきゃ」という意識が芽生えるというのはよく聞きます。子どもがしっかり考えているのに、大人は何をやっているのだろうという気付きにもつながるので、そういうところにぜひ子どもを参加させたいなと個人的には思います。

御厨 貴 ありがとうございます。時間がだいぶ押してきましたので、次の話題に移りたいと思います。アプリの話が出ましたが、地域アプリを使った安否確認や避難情報の共有は、矢守さんもお話ししてくださいところですか。こういうものと、先ほどから話が出ている、いわゆる震災の記憶を次世代に伝えていく話というのは、何かどこかでうまく組み合わせさせて別の発展をするのかどうか、その辺についてはどうでしょう。丹野さん、何かお考えなり感想はありますか。

丹野 祐子 佐藤前町長が言っていたランニング防災はすごくいいと思いました。今

日この会場にマラソンのセミプロが一人おりますので、すぐ関東地区で企画したいと思います。本当はみやぎ復興マラソンというのがあったのです。それは、東日本大震災のことを忘れないという思いで全国のランナーが走る、被災地を駆け抜けることに意味があったのですが、いろいろな大人の事情でなくなってしまったのがすごく残念です。私ごときが企画できるものではありませんが、大手マスコミの皆さんに企画していただいて、いま一度被災地を駆け抜けるランニング防災、マラソン大会、そんなものも企画できたらすごいと思います。

伝えるとか伝わるというのは、いろいろな形があると思います。実は名取の被災体験の一部を名取北高という高校生の演劇部の皆さんがお芝居にして、毎年のように全国大会に向けて発信してくださっています。今度の25日の日曜日に増田の公民館で発表会があるのですが、震災を経験していない世代の高校生がお芝居で伝えてくれます。やはり防災とか語り部と聞くと「私はもう」と耳をふさぐ人が、「お芝居だったら見に行こう」と見に行ったら、エッセンスに震災のことがちょっと入っている、楽しい話題の中に少しだけ本音が混じっている、そういうことがあってもいいのではないかと思います。

よくマスコミの方が言うのですが、震災番組を作るとチャンネルさえひねってもらえない。「震災の話はもういいわ」となる。でも、震災に触れないようなサムネイルを作って報道して、見ていったら最後にこれは東日本大震災の話だったのかとなると見てくれる人も多いとか、ごまかしながら次にどう伝えていくのか。私も今、ごまかしながらどう名取市の体験をこれから後世に伝えていくのか、本当に正念場だと思っていますし、体を動かしながら、できれば私も80歳になるまで語っていききたいので、

6分間歩けるように少し痩せたいと思っています。6分歩きます、走ります。

御厨 貴 早速実践をとということでお話しになりました。そろそろ締めに入らなくてはいいませんが、今日は南海トラフ地震の話が出ました。それ以外にも首都直下地震も言われていますし、いろいろな所で地震が起きるのは、平成以降はどうも当たり前になってきたようです。そうすると、これからもそういう地震が起きるたびに、いろいろなところでいろいろな知恵を積み重ねていかなくてはならないということになります。そこで、どこだとは言いませんが仮にかなり大きな震災が起きて、そこを復興しなくてはならないとなれば、そのためにはどういう心構え、あるいはどういう備えをしておいた方がいいのか。先ほど自分事とか他人事という言葉も出ましたが、それぞれのお立場から、それについて一言ずつお話しただきたいと思います。まず最初に佐藤さんからお願いします。

佐藤 仁 それでは最後の締めということで、実は絶対に話そうと思っていたことが一つあります。2年前に能登半島地震があり、避難所生活を見ていました。先ほどTeam Sendaiの皆さん方も避難所の写真を出していました。能登半島地震から3カ月と少したったときに、台湾東部地震が花蓮でありました。その日の夕方に避難所の写真が出ていて、ずっと映していたのです。すると、体育館の中、それから屋外に、プライバシーをきちんと守れるような小さい避難テントが並んでいるのです。中には簡易ベッドでしたが用意されていて、夕方には温かい食事が届いていました。台湾が全てそうだとは思いませんが、あの地域は既にそういう準備をしていたのです。

石破前総理がずっと言っていたのは、日

本の避難所は関東大震災から100年間一切変わっていないという話です。私も避難所生活をしましたが、避難所というのは体育館の中で、電気がない、水がない、情報がない、プライバシーがないという劣悪な環境です。一番大変な思いをした人が一番大変な生活を強いられていることについて、このままでいいのかとつくづく思っています。次の災害に備えるためにも、この部分を何とかしていかなくてはなりません。その意味で私が防災庁に期待しているのは、一つにはこういうところだと思っています。

御厨 貴 ありがとうございます。それでは矢守さん。

矢守 克也 では、二つのことを手短に。一つ目は、大きな災害に立ち向かおうとするからこそ、今すぐできる小さなことから始めるということです。いきなり大きなゴールに手をかけようすると、最初に紹介した短歌の方のように諦めというリアクションが出てきてしまうので、小さなことからやりましょう。

一例として、私の今日の資料の中にあるのですが、今まで一度も避難訓練に出てこなかった、あるいは出てこれなかった高齢者を中心に、とにかく玄関先までは出てきてくださいという、玄関がスタートではなくてゴールになるような訓練を勧めています。玄関まで出てきてくれさえすれば、他の人の目にも止まりますし、いろいろな情報も入ってきます。しかし、最初から諦めて何もしないのでは0点です。避難タワーの上まで上がるのが100点ですけども、100点を取れなくてもまず玄関まで出てくるという、30点を取れるアクションをしましょうというのが一つです。

2番目は、これは逆といえば逆ですけれ

ども、いろいろな最悪のシナリオを想像力をたくましくしてしっかり考えておくことが大事だと思います。特にキーワードは、最近よく出てきますが複合災害です。ご存じの方はあまりいないのではないかと思います。3年前の2023年が、1923年の関東大震災から100年の年でした。その年に気象庁がホームページ上で特集を組んでいて、1923年9月1日の天気図を出しています。それを見ると驚くことに、関東大震災が起こった日に、実は日本に台風が来ています。その台風に伴う強風が、あの大火災の直接的な原因ではなくても、それを悪化させる原因には恐らくなっています。あまり語られないことですが、あの大きな地震と台風がよりによって重なっているわけです。

今日の今村先生のお話にもありましたが、大きな地震・津波がすごく暑いときやすごく寒いときに起こる、あるいは台風が来ているときに、あるいは大雨が降った後に起こるという可能性は十分にあります。あるいは夜中に起こる可能性もあります。しかし、避難訓練は春や秋の昼間の天気のいいときにしかしません。これではいざというときに役に立つ訓練にはなっていない可能性もあります。そういう悪い方の想像はしっかり膨らませる。何もしないのではなく、今できることを探して一つでも二つでも積み重ねる。この二つが大事ではないかと思います。

御厨 貴 では、丹野さん。

丹野 祐子 私は15年前の東日本大震災が発生した後、息子を亡くした母親になってしまいましたが、想定外だったからとか、未曾有だったから仕方がないというような言葉を言われたことがすごく残念でした。実は、ある方から「宮城県は災害大国で、

40年に1度の割合で何らかの災害に見舞われている」と聞きました。当時小学生だった私は、宮城県沖地震を経験しています。その後、東日本大震災も発生しました。そう考えると25年後、もしかしたらまた宮城県に何らかの形で大きな災害が起きてしまうのではないかと、決して1000年に1度でも、未曾有でも、想定外でもなく、起こり得る災害は必ずまた来るのではないかと、うふうに考えられるようになりました。

25年後、健康で6分間走れるように私も準備したいと思いますし、ここにいる会場の皆さんと25年後、再び笑顔で会えるようにこれからも備えて生きていきたいと思っています。今日はありがとうございました。

御厨 貴 それでは、越中谷さん。

越中谷 郁子 いろいろ考えていたのですが、やはり子どもに伝えていきたいという思いがあります。子どもは学校などでも避難訓練をするのですが、まず机の下に潜るという行動は誰しもができていて、きっと大人もそういう訓練を受けているのでできるとしています。ただ、ある震災遺構を訪ねたときに校長先生が言っていたのですが、「学校の避難訓練に主体的に取り組んでいますか」という問いかけがあり、「先生の言われたとおり動いていないか。そこに自分たちの意見や考えは反映されているのか」という問いかけがあったのです。

それは私にとっても結構衝撃的で心に残っているのですが、何も考えずにただ訓練するのでは、やはり自分の命は守れないだろうと思います。学校の先生方の意識もそうですし、子どもたちに何かしら問いかけを続けていき、河北新報でもやっていることですが、中学生等に対する防災記者研修を地道に続ける。あと、防災というと目を背ける人もいるというお話もありました

が、防災キャンプは楽しいけれども実は避難生活に役立っているというような後付けでもいいので、楽しみながら何か学ぶということも続けていけたらいいなと思いました。ありがとうございます。



御厨 貴（ひょうご震災記念21世紀研究機構研究戦略センター長／東京大学名誉教授）

御厨 貴 ありがとうございました。皆さんに今日は思いの丈をずっと語っていただきました。今日お話を聞いていて、それから私自身質問をしていて感じたことを最後にお話ししたいと思います。本来ならば、このシンポジウムの総括をして、この15年間全体をどう見るかという2段構えで話をする前提でしたが、お話を聞いているうちに、どうも2段構えではないなと。津波という、恐らくこれまでのさまざまな災害の中でも東日本大震災が一番目立った津波の問題を15年間ずっとやっていくに従って、時間が過ぎていくに従って、それぞれのところで止まっているのではなく、深掘りされているのだというのが私の印象でした。

例えば、今日お話をいただいた丹野さんの語り部の問題、これなども実は終わってすぐの1年目とか2年目のときから語り部の問題はあって、もうそういう話を聞きたくないという人たちにどうやってこちらを向いてもらうかという問題はその頃から

ありました。

そして5年たち、10年たち、結局その問題が大きく展開して、解消していく話ではなくてむしろ、戦災の話も今日は出ましたけれども、戦災の語り部がもう語らなくなってしまった。なぜかという、聞いている人の中から「それは作り話だろう」と言われたときに、ものすごくショックが走った。この話は前のシンポジウムのときにもしたことがあると思いますが、そのような否定形ばかりで語られていた話だったのが、15年たって今日伺ってみるとそうではなくて、それをどうやったら聞いていただけるのか、そういうことをどうやって工夫していくのか。つまり、語り部の方も単に語るだけではなくて、どうやって残していくのかという残し方にさらに工夫を加えて、その工夫がものすごく大変な話ではなく、ちょっと考え方を変えてみたらこれは面白いのではないかと。

そういう問題を何も自分の地域だけで考えているのではなく、河北新報さんのような地元紙があるわけですから、今日も伺いましたけれどもそういう地元紙の活動と連携しながら、どうやって広げていくのか。もちろん中核は変えないのですが、それをより広い意味合いのあるものにしていくということは、やはり15年たってみると、そういう展開を示しているのだなと、歴史というのは生きているのだなということをつくづく感じました。

それと同時に、矢守さんが今日語ってくれたように、ある種ゲーム化していく、いろいろなものを多様に考えて、年を取った人がどうやって逃げるかという話につないでいく。逃げないで置いていくという話ではなくて、逃げ方を一緒になって考える、今言ったように玄関先まで出てきてくれればいい。スポーツみたいなものと関連させて、あるいはそうでないものとも関連させ

て、単に逃げるという話ではなく、人間が生きていく上で非常に大事な行動であるということまで考えを広げていくと、これまた非常に大きな発展があるということを感じました。

アプリの問題もそうです。実は私たちは、震災から1年目に何をすればいいかということで、年寄りには情報が行き渡っていないので、それに類するような電子機器を渡せばいいと。その電子機器に、こういうふうにすればいいと表示されるので、それに従ってくださいということで、ある町で電子機器をかなりたくさん作り、実際に渡しに行ったことがあるのです。

渡しに行くと、おじいさんとおばあさんがおられて、正座などしなくてもいいのに、正座してわれわれの話を聞いておられて、「こういうふうにするんですよ」と使い方を教えて、帰ろうとしたら「ありがとうございました」とお辞儀をし、その機械を裏返して神棚に供えて、ぽんぽんと拝まれた。それが終わったら、われわれが持ってきた箱の中にしまい、「これでずっとやってまいります」と。「それをしまってしまったら駄目ですよ。常に置いておかなくてはいけない」と言ったら、「いえ、これは大事なものですから神様に供える」と言われて、結局われわれは一体何をやっていたのかと。つまり、そんなものをぽんぽんと持っていっただけでは駄目で、実際におじいさん、おばあさんたちに使ってもらえるような電子機器にしなければ駄目なのだということを、1年目にして知ったという失態もありました。

それから失敗談でいうと、南海トラフ地震が起きたときにどうすればいいかということで、高知県ではそのための準備をしていました。黒潮町は、先ほど矢守さんがおっしゃったように想定される津波が一番大きかったのですが、それ以外の所でも避難タ

ワーというのを造って、いざとなったら避難タワーに200人入れるという説明を聞きました。200人というけれど普段はどうしているのだろうと思い、町の人案内が終わった後で行ってみると、何と避難タワーの扉のところに鍵がかけてあるのです。要するに、何か起きたときに行ってみたら鍵がかかっているということになってしまいます。だから、「鍵がかかっているのはおかしいでしょう」と言いに行くと、「いやいや、物騒なのだ」と。つまり、普段から開けていたら誰が入ってくるか分からない。一番困るのは、みんなそこがごみ収集所だと思ってごみを捨てていくので、とにかく遮断しておかないとごみがたまる。そして人が入れないという本末転倒なことになっていて、いくら何でもこれはまずいでしょうという話をしたのですが、「現実には起こらない震災のために扉を開けておくとごみが増えてしまう。増えたごみはわれわれが処理しなくてはいけないのでとても無理です」ということを言われて、そこでかなり議論したことを思い出しました。

今だったら多分、矢守方式などいろいろな方式があって、それをうまく解決できる、それをゲームにしてしまうということができると思いますが、最初の頃はそういうことがあって、これは大変だなと思うのが1年目、2年目、さらに5～6年たった頃はそんな話でした。でも結局、今日話を聞いてみると、そういう話が少しずつ少しずつ、あまり苦しまないで楽しいゲームにしたりしながら、かなり大きな形で発展していくのだということを感じました。

最後に一つ、われわれが最初に復興構想会議をやったときに、復興構想7原則というのを、最初に決めてしまわないとどの方向に行くのか分からないというので、原則の第1に実はこういうものを書いたのです。「失われたおびたしい『いのち』へ

の追悼と鎮魂こそ、私たち生き残った者にとっての復興の起点である。この観点から、鎮魂の森やモニュメントを含め、大震災の記録を永遠に残し、広く学術関係者により科学的に分析し、その教訓を次代に伝承し、国内外に発信する」。つまり、最初からアーカイブをやれというのを復興原則の第1原則にしたのです。そのとき、みんなに言われました。「なぜアーカイブなのか。これから復興していくのに具体策が何も書かれていないではないか。アーカイブは最後のところに載せるものであって、7原則の1番になぜこれをしたのか」と周辺から随分怒られました。

しかしその後、復興の15年をたどってみると、結局今日もこのアーカイブと関係するのですが、人々の記憶や記録を忘れないで、さらにそれを有効にするために残していくことが、大事だったのではないかと思います。なかなか人間というのは、そのときに適切なことをやっていないように見えて、復興構想会議がいかほどできたかというのは今になって忸怩たるものがありますが、少なくとも復興原則の1番にモニュメント、要するに記憶というものを大事にしようね、これは歴史上大事にしようねということだったのですが、それから後の15年というのが、これだけ今日たくさんの方の果実を生んだということを考えると、やってよかったということを改めて自分たちの仕事のひとつとして感じたというのが、私の今日の結びの言葉になります。

5年ごとにこの地域でやってきましたが、やはりやるものですね。先ほど言いましたが、こういうシンポジウムみたいなものは、継続は力です。やっていくうちに見えてくるものがある。それを信じて、僕ももう随分年ですけども、まだあと5年、10年頑張ってこの行く末を見ていきたい、あるいは皆さんと一緒に活動してい

きたいと思いました。

皆さん方が本当にいいお話をしてくださったので、最後にこういうまとめをすることができました。お顔を見ていると、まだまだあれも話したかった、これも話したかったというのがありますが、それはまたのことにして、これにて今日のシンポジウムを終わらせていただきたいと思います。皆さん本当に、どうもありがとうございます。そして壇上の皆さんに盛大な拍手をよろしく願います。

21世紀減災社会シンポジウム「津波から命を守るために」

再来への備え 着実に

発生から15年となる東日本大震災の教訓を学び、次の災害への備えを考える21世紀防災社会シンポジウム「津波から命を守るために」が1月23日、仙台市青葉区の市営文化復興記念館であった。河北新報社と朝日新聞社、ひょうご震災記念21世紀研究機構（神戸市）の共催。津波研究者が講演し、被災した首長経験者、伝承団体の代表らがパネル討論を行った。震災当時の証言の朗読もあり、オンラインを含め約550人が震を体験した。

パネリスト

東日本大震災 15年

河河北新報社教育・防災連携室 記者
越中谷郁子氏

コーディネーター・リモート参加
ひょうご震災記念121世紀研究機構研究戦略センタ
御厨 貴氏

京都防災研究所副所長 教授
佐守 克也氏

前宮城県南三陸町長
矢藤 仁氏

津波復興祈念資料館 閣上の記憶 代表
丹野 祐子氏

パネル討論

御前 震災か何ななんだ。どのようになお救済をくれればいいか。
矢野 震災のようには津波や津波に襲われた時に命を守れたらどうか。避難訓練を大々見直す必要がある。課題を改善するために、避難訓練と提携し、1つに「逃げ」を開発した。予知能力の津波と避難行動を可視化する内容で、逃げがカギ詞である。
防災官のフナツチズは「本気の事前防災。震災から16年たつた今こそ、次の大災害を命を守るため緊急の努力をしている期間。命を守る必要がある。東北をさんざんを南海トラフ巨大地震の備にたっていないでほしい。

[illegible][illegible]

さとう・じん 仙台商高卒。宮城県旧志津川町の町議や町長を経て、旧歌津町との合併に伴う2005年の南三陸町長選で初当選。昨年11月まで5期20年務めた。震災では町の防災対策庁舎屋上で津波にのめられながら生還した。南三陸町出身。74歳。

防災に福祉の視点を
高台移転安心の礎に



やもり・かつや 大阪大学
大学院人間科学研究科博士後期
課程単位取得退学。博士（人
間科学）。奈良大助教授など
を経て、2009年から京都大防
災研究所教授、24年から副所
長。専門は防災心理学、災害
情報学。日本災害情報学会会
員。大阪府出身。62歳。

災害必ずまた起きる 丹野氏
訓練にも主体性必要 越中谷氏



たんの・ゆうち 震災の津波で、宮城県名取市閑上中1年だった長男公太さん＝当時(13)＝と義理の両親を亡くす。2012年4月、閑上中前に「閑上の記憶」を開設し、代表として随り部やガイドを務める。仙台市出身。57歳。



えっちゅうや・いくこ 東北大学文学部卒。2001年河北新報社入社。報道部、石巻総局、生活文化部などを経て、25年から教育・防災関連室。教育に新聞を活用するNIEを担当し、小中学生の防災意識向上に向けた事業にも携わる。

丹野 名取市の被災経験から、東北高
の演劇部が「希望」で発信している。業
しめて興を引きなながら、どう伝え
いくかが大切だ。

御厨 次の災害に向けて、必要なら模
倣えたい。

佐藤 日本一の遊樂所は電気も水も情
報もプライバシーもなし、安全な環境
だ。防災は改善を期待している。

矢守 大きな災害に立ち向かうから
こそ、失うことができることから始め
る。一方で豊のシナリオへの想像力を働
かせる。天気が良いときの遊樂所だ。

矢守 高知(約四万十町)では高野寺を以て
着せしむる。御前 津波がと進んで、動をうき
たに過い一面。定期的に訪り入り、
敷を造る。一時期約三分の一は
けけるのを創するが、津波から難
す力を得る。キツチフレックス・
は、動く体を、番の防分。
防災と健康増進の単位は高齢者を
その上で保護する。
佐藤 近きシンタラ防災を報告
した取り組を支援も。さまざま
な形で防災に関与し、動きが止ま
らないところ。
畠中谷 さきさき「根にむく
たを加えられないか。果してしも
いたと大の意欲や気まにもない



パネル討論では避難行動や次の災害への備えなどについて、意見を出し合った。

基調講演

震災は地震や津波、原子事故が複合的に連鎖的に起きた災害だった。発生から間もなく15年になる現在でも対応が必要だ。今後も揺れたいはずはない複合的な災害は起きる。しっかりと備えないといけない。

震災の地震は規模がマグニチュード(M)9.0で1904年以来、世界で4番目の大きかった。誘発地震は2011年2月や22年3月にも起きた。地震活動はまだ終わっていない。地震発生後、気象庁は東部の地震情



いまわち・ふみひこ 東北大学大学院工学研究科博士課程修了。専門は機械工学。同大学院工学研究科教授、災害科学国際研究所副所長などを経て14年4月から23年3月まで所長。25年4月から副学長。復興庁復興推進委員会委員長を務める。山梨県出身。64歳。

東北大学学長・災害科学国際研究所教授
今村 文彦氏

避難経路 歩いて確認

[illegible]

朗讀

震災当時、多くの人が混乱と不安の中にいた。今につながる大切な記憶。被災者の証言を朗読で届ける。

◇

宮城県名取市開上で被災した和代町内会長の切実な思い

つなぐ

きなる。震災前に学んだ神戸市衛生局の資料が類りになった。自分たちも現場の思いをこめた。

13年前に聞いたセミナーで当時の仙台市長が語った経緯を共有する。

震災発生日の翌日に駆けつけ

国と戦いをやめ、賠償を決まっ

た。教訓を伝えて、被災者への強い志を仙台が受け継ぐべきだ。災害対応の向上に貢献していきたい。

先人は災害の記憶を古文書や石碑で伝えてくれた。人が人に直接伝えれば、00年。

津波で自宅が流された。2
カ月後に仮設住宅へ移るも、
5人家族に提供されたのは3
畳間が二つ。ストレスがたまり、
時が少し当たらただけで
んかになった。

た神戸市職員が、阪神・淡路大震災の記録を共有してくれた。災害法制の矛盾点やむすから人の心へ、

い。入居基準となる災害救助法は1947年制定で今の生活に合っていない。被災地の現実を真に伝えたい。

仙台市職員で若林区の保健所業務を統括した50代課長の体験談だ。

endai 1000名

戦した。レイアウト図を作るも無視する人が続出。感染症の恐怖も理解してもらえない。事前に対応を準備すべきだと学んだ。

Team S



震災をテーマに朗読をするTeam Sendaiのメンバー

Team Sendai 1000年先へ記憶つなぐ



Team Sendai（チーム仙台）は、仙台市職員など有志でつくる自主勉強会。現在は15人。東日本大震災の現場に居合わせた職員や被災者の体験を記録し、多面的な事実の共有化を図る「災害エスノグラフィー調査」に取り組む。成果を朗読や映像などで発信し続けている。

21世紀減災社会シンポジウム 報告書

津波から命を守るために

～東日本大震災15年・次の巨大地震への教訓

発行日 令和8年5月

編集発行 (公財) ひょうご震災記念21世紀研究機構研究戦略センター
〒651-0073 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2
人と防災未来センター 東館6階
TEL. 078-262-5713 FAX. 078-262-5122



【写真提供：河北新報社】(宮城県南三陸町)

(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構
21世紀減災社会シンポジウム報告書